
鈴木三兄妹、異世界へ行くっ！！

宮古奈都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鈴木三兄妹、異世界へ行くつー！

【Zコード】

Z0994X

【作者名】

富古奈都

【あらすじ】

ある日突然、Hレベーターから、異世界ヘトリップしてしまった
鈴木三兄妹たち。

お兄ちゃんはへたれな男子校生勇者

お姉ちゃんは将来有望なBLマンガ作家にして女子高校生の聖女
だけど、末っ子は児童で異世界の言葉も言語も解らないが順応性が
高い。

そんな鈴木三兄妹の召喚された目的とはただの魔族退治ではなかっ
た……

召喚

アーティストリア公国は20年前、魔族狩りを始めた。

先の魔王、アレキサンダー・アーティストリア王が魔王の首を打ちと
り、国に持ち帰った。

国の大聖堂に国の繁栄と力の象徴として静かに安置されていた。

だが、魔王の七人の子が残つており、いまだ魔族狩りは終わつたか
に見えていたが、水面下では魔族狩りはいまだ続いていた。

朝、いつもの時間に自宅マンションの8階に住んでる鈴木三兄妹は
学校へ行くためにエレベーターに乗る。

ちりんっ……

1階に降りてエレベーターが開き見えた景色はいつもと違つものだ
った……

よつじん

『よつじん、いらっしゃいました。

勇者様、聖女様、この世界をお救い下さる救世主様方、このときをお待ち申しておりました。』

と、金の煌めく長い髪に透けるような白い肌。綺麗な濃い青い瞳をもつ。フランス人形のような美少女がこちらを見て、話していた。

鈴木三兄妹は本能で悟った。

見なかつたことにしょ!う!

聞かなかつたことにしょ!う!

何もなかつたことにしょ!う!

関わらないほうが賢明だ。

そう思い、エレベーターの閉じるボタンを押す。

が……閉まらない。

『残念ですが、使命を果たすまでは帰れませんですわ。』

先ほどのフランス人形似の美少女は言つ。

そり口喚されてしまつたのだ。

お約束の展開だ。

もう後戻りは出来ない……。

三五（複数形）

《》は異世界語で「」は日本語だと思ってください。

目的

鈴木三兄妹たちは、仕方なくエレベーターから降りた。

後ろを振り返ると鏡の中から出てきたらしい。

『はじめまして、私はあなた方をお呼びした。エヴァンナ・アディストリアと申します。

ここはあなた方とは異なる世界であり、今ここにいらっしゃる国はアディストリア公国の大聖堂でござります。』

フランス人形似の美少女は言つ。

辺りを見渡すと、キリスト教の教会に似ている。

上を見上げると星々と月が煌めくステンドグラスが光輝いていた。

エレベーターの中ではフランス人形似の美少女のエヴァンナしか見えなかつたが、他にも三人の男性と鎧をきた二人がいた。

男性の中に一人はよくエヴァンナに似ている青年の方は二十歳くらいで背は高く、体型もしつかりしている。

服装は中世の西洋貴族が着ている感じのに似ている。

もう一人は、少年と言つても近い感じだ。

背は低くもないが高くもない。まだまだ伸びる感じだ。体型は細身である。中性的な雰囲気で服装も西洋貴族的にだか、半ズボンなのが少年らしさを出している。

最後の一人は真っ赤に燃える赤毛に緑の瞳でちょっとつり目の顔の整った青年だ。

体型は背は高く細身だ。服装も青を基調とした知性的な雰囲気で西洋貴族的だ。

エヴァンナはそれとは違い、白いシンプルなドレスだが、神秘的でどこか巫女さんを思わせる服装に首には色とりどりの数珠に真ん中に鏡がついていたペンダントをしていた。

エヴァンナは話を続ける。

『あなた方を召喚した理由は、この世界に残された魔王の七人の子を保護して頂きたいのです。』

『なんで、魔王の子供達を保護しなけりやあいけないんだ。
普通は退治するもんだろー』

鈴木三兄妹、長男発言。

だか……

「ねえ、お兄ちゃん。せつめいからのお姉ちゃんなんて話してる
？」

その前に、大問題発生！

鈴木三兄妹の末っ子は今までのヒガマンナの言葉は通じていなかつ
たのだ……

この先、どうなることやら……。

理由

『そちらのお小さい方はこちらの言葉をお分かりにならないのですか?』

エヴァンナが尋ねる。

鈴木三兄妹、末っ子は首を縦に頷く。

言葉は分からなくともなんとなく周りの雰囲気が読める。

『それでしたら、私がこちらの言葉をお教え致しますが?』

末っ子、笑顔で頷く。

何だかすでにゴリゴリケーションがとれている。

末っ子の国語教師は決まった。

ひとまず、問題解決した。

『では、肝心な魔族保護のほうは余が話をしよう。』

金髪の一一番背の高い青年が言った。

ここから、鈴木三兄妹が召喚された理由が説明された。

その1 1912年ほどアドティスニア公国周辺は近隣諸国で争いがなかつた。

その2 先代の国王は魔王を倒し、魔族狩りをする者が増えしまつたこと。

その3 魔族とは交流がなく、本来むやみやたらに人間を襲うこととがなく、静かに暮らしていたこと。

その4 先代のお陰で魔族達が激減し、このままだと絶滅危機があること。

その5 調べによると魔王には概ね7人の子供達がいることが解り、王族の者は警戒され襲われる可能性が高い為、それを第三者の手で探し出し、保護してもらつこと。

その6 魔族に対する偏見なくすために鈴木三兄妹を召喚したのである。

以上が鈴木三兄妹が召喚された理由であった。

先代の国王は半年前に亡くなり、現在説明した青年がアーディストリーア公国現国王アラジン・アーディストリアであった。

属性（前書き）

これから会話を「」で行います。

属性

「それでは、属性を詮索させて頂きだきます。先に私が行いますので、ご覧下さい。」

エヴァンナは用意されてある丸い水晶玉に手を置いた。

水晶から文字が浮かび上がってきた。

『名前・エヴァンナ・アディストリア

年齢 14

性別

出身 アディストリア公国 城の中で生まれる。

職業 アディストリア公国第一王女
月の精霊に愛されし巫女姫

レベル 12

H P 3 4 M P 6 8

祈り』
技 召喚

次に兄が手を置いた。

『名前・シズヤ・スズキ

年齢 17

性別

出身異世界地球の日本

職業 学生 高校3年

へたれな勇者

レベル 1 ……情けない

H P 1 0 M P 2

技 なし』

その場について文字が読める者皆が心中で思った。

「へたれな勇者、大丈夫なのかっ！」しかも情けないと辛口だった。

次に静華が水晶に手を置いた。

『名前・シズカ・スズキ

ペンネーム ジュリエット・シャーロック

年齢 16

性別

出身 異世界の地球日本

職業 学生 高校2年

アマチュアのB「 マンガ作家将来有望

聖女

レベル5

H P 18 M P 8

技 72時間不眠不休で創作活動ができる。』

その場にいた文字が読める者皆が心の中で思った。

「 「なんか凄い！B」とはなんだ。勇者より強いのは何故なんだ。」

最後に末っ子の雲が水晶に手を置いた。

『名前 シズク・スズキ

性別

年齢 10

出身 異世界の地球 日本

職業 児童 小学5年

レベル 10

H P 3 0 M P 2 2

技 正面打ち一教表

突き小手返し

横面打ち四方投げ』

その場にいる文字が読める者皆が心中で思った。

「「知らない技だ何なんだろ?」」「

末っ子の零は文字が読めない。

上の兄と姉は知ってる零は合氣道を習つてること。

二人は互いに同じことを思つた。

(我が妹よ!強く育つたなあ。)

勇者の剣と聖女の羽根

「ほら、我が國に伝わる勇者の剣です。
鞘から剣を引き抜くことは勇者様しか出来ません。

シズヤ様、どうぞこの剣を鞘から引き抜いて下さいませ。」

エヴァンナから静也へと剣が渡され、引き抜く。

かちやつ……。

鞘から剣が引き抜けた。

が、刀は竹光だ……

本当に情けない……。

これには皆、妙に納得した。

(（へたれな勇者は伊達じやない。））

静也が剣を鞘に戻す。

居たたまれない感が流れる……。

「流石ですね。勇者の剣を兄上達が抜くことが出来なかつたのですから、剣の刃は勇者様のレベルに応じて変化すると歴史の書で言い伝えられていますので、これからでござりますわ。」

エヴァンナの助け船ができる。

「そして、聖女様であらせますシズカ様にはこちらの白い羽根とインクがござります。これらは聖女の羽根と魔法のインクと呼ばれております。」

エヴァンナから静華の手に聖女の羽根がてわたされた。

すると、白い羽根は羽根ペンへと変化した。（静華愛用のマンガを

書く時に使うペンだ……

静華はにっこり笑顔で言つ。

「ありがとうございます。月の巫女姫様、大事に使わせて頂きます。

」

兄と末っ子は同時に心から思つた。

((あの人は必ずやる。絶対布教する。))

末っ子は何を思ったか兄に同情の目を差し向けて、ぽんっと肩に手を置いた。

(あたしはお兄ちゃんの味方だよ。)
と末っ子の零は日本語で言つた……。

零はすでに姉の黒いオーラを察知して、兄を心から心配していた。

この世に生をうけて妹歴10年、この勘は今のところ外れたことがない末っ子の零であつた……。

男子禁制桃色話（前書き）

雪視点です。
ボーイズ・ラブ苦手な方は飛ばし下さい。

男子禁制桃色話

鈴木 露（10）小学5年生 つむのお姉ちゃんはで美人で運動神経抜群、成績優秀な白模ですが……

日本的一般世間で言つ『婦×腐○女子』で

近所でも残念な美少女で有名です……。

そもそもあたしが物心ついた時には既にお姉ちゃんはめぐるめぐ世界の住人になっていました。

今のあたしより一つ下くらいの年から『ミケイラストやら4コマを書き売り出していました。

そしていま、まさにお姉ちゃんは新境地へとやつてきました。

あたしはなんとなく雰囲気が読めました。

お姉ちゃんがあたしを呼んでいます。

「ランドセルから一冊の薄いマンガをとつだしてお姉ちゃんにわたしました。

「ところでシズカ様、その羽根ペンで何をお書きになるのですか？」

スゴくキラキラした金の髪に白い肌の濃い青い瞳を持つとてもきれいなお姉さんが何か言います。

「ボーアズ・ラブ
B」マンガです。」

お姉ちゃんが何かに言つたのかあたしにもほつきり意味が分かりました。

「…坊主等部漫画?
とは何でしようか?」

キラキラのお姉さんの微妙に惜しい発音が聞こえます。

「ボーアズ・ラブとは即ち美少年同士の恋愛を主題とし、性的行為を感性的纖細に描いた絵画です。」

「エビーんつと一派に

周りの美形のお兄さん方3名が引いてます。
鎧兜せんぱねは辛うじてみんなきました。

お兄さんは慣れているのです。と顔にでています。

でも周りの方のアーティストが何故なんですか?

あとで、お兄ちゃんに聞いて納得しました……。

お姉ちゃんが聖女様でその聖女の羽根であれを書くと……。

周囲のお兄さんがみんなにアーティストでしたのが分かりました。

ちなみに、あたしがお姉ちゃんに渡した薄い本のタイトルは、

『忍ま乱郎～少年たちの忍び恋～』
作者 ジュリエット・シャーロック

内容は小学生向けのほつぺたちゅーの描写までの初心者入門編だけ
ど、衆道についての古い歴史があり、あとでこのマンガを読んだエ
ヴァ先生が衆道の授業や忍者の異世界へ歴史的価値があるとかで、

キラキラのお姉さん」とエヴァ先生が目を輝かせていました…。

後に、聖女ことお姉ちゃんはジュリエット・シャーロックの名で覆
面B-マンガ創作家として一部の腐女子乙女たちの教祖となり、
布教こと腐教活動は成功して魔族保護の一躍を遂げるのですが…

それは、しばらく先のことでの時は誰にも予測出来ませんでした。

ちなみにこの時、あたしはお姉ちゃんが聖女じゃなく魔女として
召喚されたと思つていました。てへ。

先王の遺産

「最後に僕から父上の遺産を見せてやる。」

金髪碧眼の美少年」とジャクソン王子だ。

ヒーハー、ニヤ、ヤツリフが言えた。

ジャクソン王子の声はまだ少し高めだ！

大ヒットだ！

お姉ちゃんが鼻血放出しだした…。

説明しよう！

姉の静香は、好みの美少年や美青年を見ると脳内妄想がヒートアップし激しく萌え尽きてしまい処理しきれなくなってしまつ。

そこで鼻血を放出してしまつのである。

セーラー服の美少女に鼻血とは考えがえたくない組み合せ…。

静香のことば、いの際放つて置こう。

ジャクソン王子は大聖堂の地下へ3人を案内する。

「これが亡き父上の遺産！魔王の首だ！」

それと同時に白い布を引いた。

魔王の首だ……。

一言でいうと、
魔王の首だ。

怖くない、むしろ恰好いい。

腐れないよう、防腐の魔法をかけているとリアルで迫力がある。

突然、何を思ったのか末っ子の零が動き出し、がばつあと龍の口を開き頭を突っ込む。

周りが唖然としたのも無理はない。

かつて、死んでいるとはいえ魔王と言われたものに口に頭を突っ込む者は今までいなかつたのだから……。

兄と姉と末っ子といいこの者達で本当に大丈夫なのだろうか…。

アディストリア公国の魔族保護計画は前途多難だと、誰もが思った。

——ソナタ ワ レ ノ ゴ ガ
タノ ム ワレ サイゴ ノ コ
ナヲ ツタエー

ノアール。と、

その微かな声が聴こえたものはその場に、

一人だけいた。

先王の遺産（後書き）

やつとプロローグ的な話が終わりました。

兄は聖女（女装）を演じる 前編（前書き）

兄、 静也視点です。

兄は聖女（女装）を演じる 前編

Hレベーターから異世界へきて、3田田の毎間の出来事だった。

ことの始まりは、静華の一言から始まった。

静華は今夜、開かれる舞踏会にアーティストリニア公国の騎士団長Hスコートされていく予定だったのだが……

「私、出ない。それよりお兄ちゃん代わりにでて」

「嫌だ」

俺は何だか身の危険を感じて一歩後ずさる。

「私、いつ誰かに命狙われて、襲われるか判らないし、お兄ちゃんに代わってがんばってくれるよね？」

静華にそこまで言われるといかん。流されてはいかん。

俺は負けない。ここに領いたら俺の男としての尊厳が無くなる。

「静華その為にこの国一番の騎士団長がエスコートしてくれるんだぞ。」

俺は祈る想い、いや神にすがる想いだ！

神様、仏様、鬼様

この憐れな勇者、静也を助けたえ、いや助けて下さい。

ヘルプ・ニーツ！

「だからじや、ないの騎士団長でしょ？
もつ、萌えまくちやつて本番で鼻血放出しちやうで怖いのよ。
それに、お兄ちゃんには初めから拒否することはありませんので。」

静華はゆっくりと俺に近付く…

俺の意識は強制終了せられた。

ふと、気が付けば静華に似た女性がいた。

いや、違う。

これは、俺だよ。

またしても、俺は負けたのだな。

これで何度目だろうか……

中学高校とあいつ（静華）のせいで、女装癖だのオカマだなんだ
噂がたつたり、俺を題材にしてBLマンガ書くし、恐ろしくて読め
ない。

「綺麗になつたでしょう。これなら簡単にバレないでしょう。」

静華はにっこり笑つて俺を見た。

「見た目、だけなら声はどうあるんだ。」

「喋りたくないといいよ。霊みたいに、言葉解らない設定でって、月の
巫女姫様に伝えてあるから、お兄ちゃんは扇子で顔隠して適当に相
づち打つて置けばいいから。」

「魔者としての俺の出席は？」

「今日は出番なし。お腹饥わして休みます。」

最悪だ異世界でも妹に敵わないなんて……

まあ、ゲリしました休みますじゃあななかつただけましか……

こん、こん、

ドアを叩く音がする。

これは、俺にとって戦いのゴングがなる音だった。

兄は聖女（女装）を演じる 後編（前書き）

聖女に成つきたいとするが、ときどき静也視点に戻ります。
PV 1000 越えました。ありがとうございます。

兄は聖女（女装）を演じる 後編

ドアの開けると向こうでアーティストリア公国 第一騎士団所属の騎士団長が待っていた。

明るい茶髪に春の暖かい空の瞳を持ち優しそうな顔立ちの良く聞く甘いマスクの二十代半ば位の紺色のタキシードを着た優男が立っていた。

名前は確か…忘れた……。

騎士団長でいいや、異世界語解らない設定だったし、聖女を演じてよ。ナ

「あなたが聖女殿ですね？」

騎士団長は言つ。

その声は低く美声だ。

普通の女の子だったら腰にきてゾクゾクするだらつと細つ細の持ち主だ。

背も高い、聖女よりも田線が上だ。

聖女はピンクのドレスを着ていた。露出が少なく。
清楚で美しかった。

ただ少し化粧濃いのが残念だが、黒い髪に瞳は「」の国では珍しく、
綺麗で魅力的だ。

騎士団長は膝まずいて聖女の手を握る。

「私はアーディストリア公国第一騎士団所属の団長を勤めております。
ランスロット・ハーバードと申します。
今宵は私を御相手に楽しみ下さい。」

そうして、騎士団長は聖女の手の掌に舌を滑りした。

聖女は握らなれてない手がぎりっと握りしめ手が白くなっていた。

舞踏会ではつゝとおしい視線がいくつもの注がれていた。

セレベ、

「今晚は、ランスロット様、シズカ様」

エヴァンナ王女ともう一人焦げ茶のお下げにぐるぐる牛乳瓶底眼鏡の灰色のドレスを着た地味で小さな女の子が一緒にいた。

「おや、その子はだれですか？」

騎士団長が問ひ。

「ええ、この子は私の教え子でシズクと申します。」

そう答えると、小さな女の子は舌つたりすな言葉で、

「お~る… オタマシャン」

霧は早くも異世界の単語を覚えつつあるようだ。

しかし、おたましゃんとはだれ？

霧は聖女の手を引いた。

“やめやめ、お姉ちゃんと会ったかったらしく。

霧は聖女を伴つてダンスホールへと向かつた。

少女との踊る時間は正直心からほつとす。

(お兄ちゃんが初めて踊る相手で良かったよ
そうだ、念のためパーティー組もう)

少女は日本語で言つ。

ああ、お兄ちゃん顺利に尽きる言葉だ。

しかしパーティーとは?
もつ一緒に踊つているし..
(まあ、いいだろう)
と小声で零に言つ。

ああ、いかん聖女の仮面が外れてしまつ。

聖女と少女は騎士団長とH女の元へ戻る。

一人はお酒を飲んで話していた。

聖女は日本では未成年者なので飲めない。

騎士団長は聖女を踊るつと誘つ前に小さな少女が着かず、騎士団長
をぐいぐい引っ張つて行つた。

騎士団長は中腰で踊り難そうで少女の方も足を数回踏んでいた。

聖女はその間、ハウアンナ王女と踊っていた。

結局、騎士団長とは踊る事なくやつと舞踏会も終わった。

王女たちと別れて、聖女の私室へまでついてきた…騎士団長。

「あなたともう少しお話したいのですが、中に入つても宜しいでしょうか？」

聖女は言葉が解らない素振りでとりあえず聖女の私室へと入れてしまつた。

流石に疲れたようで聖女はソファへ座る。

何だかわざと様子が変わつている。

聖女を見る瞳に艶かしい色をはりこんで、じりくつと全身を見ている。

「聖女殿、申し訳ない……」

騎士団長がゆっくり歩み寄る。

何だか怪しい雲行きだ。

聖女が座ってるソファに騎士団長が隣に座る。

「……聖女殿……」

騎士団長は聖女の耳に頭を寄せて呟く。

その熱を帯びた声は色っぽく、耳にかかる吐息に聖女はぞくっと身体が反応する。

騎士団長は聖女を優しく抱きしめ、左手で頭を撫で、右手は聖女の腰をしつかりと弓き寄せ、ゆっくりとソファへと押し倒していく。

ぞくっとソファが軋む。

聖女はしっかりと騎士団長に組しかれている。

聖女は両手で騎士団長を必死で押し戻そうが両手は聖女を引き寄せていた手によつて拘束される。

聖女は騎士団長の下半身の熱く固くなつたそれが自分の太ももに押し当たられているのに気付く。

「ひつ」

と恐怖を感じて聖女が声を出しが、騎士団長の顔はすぐ聖女の手の前にある。

騎士団長は聖女の紅い唇に自分の唇を重ねよつと手を握り

がしゃんっ！！

その音を立てたのは焦げ茶色のお下げの髪にぐるぐる眼鏡をかけ、灰色のドレスを着た幼い少女だった。

幼い少女はワインボトルを握り絞めてボトルの中央からその半分が割れている。

騎士団長の頭を殴つたのだ。

さらに少女はガラスの窓を回し蹴りで蹴り壊して、凶器のワインボトルをその辺に投げ捨てた。

その少女は聖女を氣を失つた騎士団長から引き離すと、

「きやああああああ――――――」

と、大きな悲鳴を上げた。

その声を聞いた見張りの兵士が数人やってきた。

「せいしょ、ゆかい。きし、かばう。」

たどたどしい、発音で状況を説明する。

要約すると聖女が誘拐されそうになり、騎士団長が庇つて襲われたところという感じだ。

状況からしてもその時の聖女の様子は酷く責ざめていて、騎士団長もソファの上でうつ伏せで後頭部にタンコブをつくり、ガラスの破片で怪我をし、おでこから血が流れていたので、ほぼ間違い。

ただ不思議なのが何故凶器がワインボトルだったのかである……。

しばらくして人が居なくなり、幼い少女と聖女の二人きりになつた。

すると、

(お姉ちゃん、ヒュア先生、出でても大丈夫だよ。)

幼い少女が日本語で言った。

ぐるっと部屋の一部の壁が回転して一人の少女が現れた。

(お姉ちゃん、騎士団長さん) 一体何飲ませたの?

(お城にあつた図書館の本でもうむらの薬をつくってみたの効果抜群だったみたい。

良いもの見れちゃった田の保養。いひひ)

「壁が回転するよう魔法でつくってみたのですが…カラクリとは面白いですね。」

末っ子、本物の聖女いや魔女だ!
そしてこの国の王女が順に喋る。

(おこ静華つー、俺の真操はどひなる)

聖女いや静也が言つ。

(そんなの減るもんじゃないし、いいじゃない)

(お姉ちゃん、今回のは行か過だよ。お兄ちゃんの尻の穴はへら
なくとも足くないよ)

末っ子よ、君はどいままで知つているんだ……

怖くて聞けない。お兄ちゃんであつた。

ともあれ、舞踏会での騒動で事実上この国の騎士団長をノックアウトしてしまった零のレベルが一つ上がり、静華も薬の調合で経験値が上がり、やはりやばい方向性でレベルアップしている。

静也もRPG的に零とパーティーを組んでいたとかでおこぼれながらにレベルが一つ上がっていた。

本当に情けない…レベルアップの仕方だった。

兄は聖女（女装）を演じる 後編（後書き）

こつもよつと姫くなりました。

昨日の夜から静也は一睡も出来ずに真っ白なまま灰と化していた。

ああ、可哀想なお兄ちゃんと雪は心の中で思った。

あの勘はまたしても当たってしまったのだ…自分の予想を遥か上回る以上に。

騎士団長の様子が変だと舞踏会で一緒に踊ったときに気付いていたのだ。

視線は聖女に扮したお兄ちゃんに視線がいき、身長差の為に中腰になるのは分かるがやけに動きが変で音楽と合わせ足を数回踏んでしまった…。

しかも、殴ってしまった…ワインボトルで。

今回は流石に相手が相手だけに隙がなかつたのだ。

それからエヴァ先生の国語の授業は毎日、午前中だけ教わる。

いろいろ忙しいのに時間をつぶつて教えてもらっている。

授業に必要なのは異世界の低学年向けの語学の教科書と雲専用の白いチョークと黒板と黒板消しのセットだ！

この白いチョークはエヴァ先生が魔法をかけて作ったいくら使っても減らなくて、防水加工施し、黒板以外の落書き禁止防犯追跡お知らせ機能がついた工口で優れた魔法のチョークを貰ったのだ。

それから、勉強したあと雲は城の図書館で絵本を4、5冊借りてくるのだ。

毎晩、静也か静香に読み聞かせてもらひ。

雲は焦げ茶色のお下げのカツラにぐるぐる瓶底眼鏡をして目立たな

くじてるので、いろいろな場所に動き回れる。

お城の中もいろいろ探索できる。

お城の中には洗濯する人や掃除する人、馬の世話をするや料理をする人、庭を綺麗にする人など、色々な人が専門的に仕事している。

雪はそれらの仕事を見ながら、手伝いをしていのだ。

お陰でここでの生活に慣れるのが速い。

雪が絶賛創作活動中の姉と未だにもぬけの殻となつた兄にお皿い飯を運んでいた時のことだ。

マイドちゃん達のウワサ話が聞こえてくる。

「ランスロット様がお目覚めになつたやうよ。」

「昨日の聖女様の誘拐事件でしょ？」

「さうそう、我が身を楯にして聖女様をお守りしたやうよ。」

「ランスロット様、ステキッ！」

「でも、不思議なのが何でも凶器がワインボトルだったんですねって。」

「アラジン国王もこの件に犯人を追跡するよう指示してないのよ。」

」

「どうしてかしら？」

「はい。
犯人はあたしです……。」

雪は居たまらない気持ちで姉の生態確認と兄の様子を見に行こうと速足でその場を通り過ぎた。

今頃、エヴァ先生が忘却の魔法をかけて騎士団長さんの記憶を操作して隠ぺいしてこむだろつと零は思った。

「……んう……うう……」

頭が痛いのは何故だ？

ランスロットが田を覚ます。

「お加減はいかがですか？
ランスロット様？」

そつ答えたのはエヴァンナ王女だ。

「あのひ、エヴァンナ王女、聖女殿は？」

「ええ、じ無事ですわ。今はじ気分が優れないようでお休みになつておいでですが、あなたのことをじ心配あそばせでしたわ。」

「国王、失礼ながら職務を真つ当出来ず、申し訳御座いません。」

エヴァンナ王女の隣に立っていたアラジン国王は言つ。

「お前に落ち度はない。
この件にはもう触れるな。
犯人はすでに分かっている探す必要はない。」

「犯人は誰なんですか？」

「」の件には余がもう片付けた。お前が知る必要はない。」

アラジン国王はいいおえるとランスロットの部屋を出ていった。

「ランスロット様、今日はゆっくりお休み下さるませ。それでは、
私も失礼致しますわ。」

エヴァンナ王女も出ていく。

一人になるといろいろ考える…

どうにも記憶が曖昧だ。

私は……思い出そうとすると頭痛がする。

頭のタンゴブせいだらうか？

私は聖女殿に対して何かにとんでもないことを仕出かそうとしていたような……。

何だか眠くなってきた……な……。

ふと、目が覚めた。

外を見ると月が真上まで昇っている。

少し外の空氣でも吸おうとランプショットは灯りを持って外へと移動した。

大聖堂の方から声が聞こえる。歌声だ。
その歌声は聞いたこともない言葉で夜の空に溶け込んで透き通つた声だ。

大聖堂の向かう度、その歌声ははつきりと聽こえる。

可憐で美しい歌声だ。

その歌は優しくまるで子守唄を歌つてゐるようだ。

歩みより近づく、大聖堂の中庭でその歌声がふつと止まった。

人の気配を感じたのだろうか。

歌を歌つていた人物の人影が遠くから垣間見えた。

黒い髪の女の子だ。

黒い髪に知らない言葉の歌と言つたら、あの方しかいないだろう。

少女は大聖堂の中庭にある木に身を隠しているつもりらしい。

手にある灯りで照らせば影が見えている。

少女の元へ静かに歩んで行く

「かお（頭）、み（い）たくないっ！」

少女の方から声をかけてきたが、拒絶の言葉だ。

緊張でもしてこらのだらつか。声が裏返つてこる。

歩くのをやめる。

「昨日の夜は申し訳ござりませんでした。あなたをお守つある」と
も出来ず、
あなたに怖い思いをさせました。
すべて私の不手際でした。

それでは、失礼にします

少女に向ひて立とて、後を回れようと歩きだす。

「まじっー。」

少女は焦つて弓を組める箭葉を口へ。

「『めん。けが、した、めいわく』

少女は裏返った声でそういうと一目散に中庭の木の暗闇から大聖堂の中へと姿を見せずにあつといつ間に気配が消えた。

どうやら、嫌われていた訳ではなく、少女は自分のせいで怪我をさせたことに謝ろうとしたのだ。

無意識に口元が緩む。

もし、機会があつたらあの歌声を聞きたいと思つた。

へたれは治らない。こゝやの「と機ねだ」。前編（前書き）

P V 2000 ありがとうございます。

途中でボーネズ・ラブのマニアックな話がありますので苦手な方は
飛ばして下さい。

後編から読んでも差し支えありません。

へたれは治らない。いつそのこと憐れだ。前編

「朝のラジオ体操第一

——チャンツチャツカ、チャカチャ力
チャンツチャツカ、チャカチャ力

タタターンッ！

ターン、ターン、タータタッタン！

まずは両手を大きく広げて深呼吸つ――――

只今、ラジオ体操第一が流れている。

体操をしているのは現在2名。

異世界ヘトリップした高校生勇者とその一番下の妹。

朝から清々しく、兄妹仲良く体操している。

『小説家になろう』または『小説を読む』を通じて『』覧の読者様、もし異世界トリップで勇者または主人公がラジオ体操をしている小説がございましたら、ぜひお教え下さい。

もし同じネタでかぶついたのでしたら、この場をお借りしてお詫び申し上げます。

もじ、ぜんぜん良いと仰有りわれる作者様でしたら、ぜひともお友達になつて下さい。

「お前達、朝から何をしているんだ?」

金髪碧眼に少し声が高い美少年王子様。

「ジャックしゃむじしゃん、おひさまーよこいれつ、つわい…マッシュル?」

一番下の妹の挨拶に、ジャクソン王子が笑つた。

「ジャクソン王子様、御早う御座ります。」

兄は妹の代弁を兼ねつつ挨拶する。

今朝、出来れば土下座してお詫びしたい人物の一人だ。

雫の挨拶もその思いでいっぱいに現れている。

その理由は昨日の晩に遡る…。

「 扉絵できたよ～ 」

この国に召喚された聖女こと鈴木静華の一言だ。

「 お姉ちゃん、今回はどうなの?……ツ……」

勇者と聖女の妹といつある意味凄いポジションにいる雫は姉の書いた扉絵を見て固まる。

表現できるならば 雫の今の表情は(。ー。)こんな感じだ。

何故ならば、その扉絵の人物一人は……

あの騎士団長とH'アンナ王女だ。

…お姉ちゃんはB」マンガじゃない王道少女マンガを書き始めた…。

雲のある意味ショックを受けていた。

あの三度の「飯プラスおやつよりB」マンガ本を「よく愛する姉が

…?

衝撃のあまり雲はたぶん勇者? であります兄である静也にもその扉絵を見せる。

今も灰と石化している兄を田観めた。

「静華つー！」の一人はもしや？』

「そうです。ジャクソン王子とランスロット騎士団長」

((ああ、あなたはこつものあなたのままなのですね……))

兄と末っ子、重なる心のツッコみ。

しかしなぜ？

ジャクソン王子が登場？

雲が姉、静華が書いたネームを読み始めた。

5分後。

読み終えた雲。

「お姉ちゃん、今日は『男の娘』なんだね。」

「ピンポーンー雲ちゃん、大正解つ！」

静華は笑顔で答える。

「男の子？」

「違うよ、『男の娘』^{おじいわい}だよ。

女の子のカツコウをした男の子でつまり女装よ。」

兄の問いかけに答える静華。

「お姉ちゃん、今回はこの国で同性愛は抵抗感じる人、多いみたいだからいいと思うよ。

けど、か弱い双子の妹の替わりに兄が舞踏会へいつて男だつてバレるシーンのジラガとれて上半身が見えるとこは鎖骨から肩のラインまで！

キスのとこははつきり書いちゃダメ！
月を背景に一人の影が重なつてキスしてゐるよつに見せるー。」

「え〜。つまんない、乳首もだめなの？」

「いじの世界の性に関する娛樂的書物では刺激が強いから男の乳首でもアウト。キスシーンもー。」

「ジャクソン王女の可愛」

「ふつ……突然、吹き出して笑う静也」。

「あはははー。あー面白い親父とお袋、そのまんま再現したみたいだな……いつも会話はマニアック過ぎてついてけないけどな……」

鈴木三兄妹の父はフリーのギャルゲーシナリオライターで母は父が契約している会社の編集長をしている……

血は水よりも濃いというが本当のようだ。

変な妹達だがやはり俺の家族なんだな…

俺が早く強くなつて魔族を捕獲してやれば家に帰れるんだよな。

この際だ！

雲に合氣道（護身術）を習つて強くなろうついで心に決めた兄、静
也の決心だった。

しかしながら、雲よ君はいつたいどこまで知つてているんだ。

やはり怖くて聞けない。兄の静也だつた。

そして、話は最初に戻る。

へたれは治らない。いつそのこと憐れだ。後編

『知らぬが仏』

といつ言葉がある。

今はその時だろ？。

たぶん、本人ためにもその方が良いのだ！

鈴木三兄妹の必殺、アイコントクトー！！

王子二ハ内緒ダ！

イエス、マイブライザー

二人の視線での会話が成り立つ。

「ところで朝早くから何をしようとしているんだ？」

「たんめん」

「くじら道の稽古ですか。」

「面白かったな。見学して構わないか?」

「ひやわ」

「せひる、せひるや。」

朝の稽古は上手く転がりとて壇面に投げ飛ばされて擦り傷ができた。

「お前の方が強いのだな…、最初は頭のネジが一本とんでいるかとおもったが、小さこながらに苦労しているんだな…」

「 もうだい、 しつ、 さわる、あたり、お前。」

「 兄妹ですから、 .. 尻拭いは当たり前です。」

兄、代弁で名誉挽回できるか..

「 ... もうか.....」

出来なかつた。

「 もうだ、エヴァの授業の後にでも馬に乗つてみるか?」

乗馬のお誘いだ。

「 ひや、 たのむ」

「 ぜひとも、 楽しみです。」

そして、

勇者の一番上の妹、零は兄より一〇〇三先に秀でていることが判明した……。

乗馬と体術においては。

これには、流石のジャクソン王子も驚いている。

「勇者の妹は、今まで乗馬の経験は？」

「いや、初めてます……です。たぶん……」

この間に馬に乗れるようになつたのだらつか……。

それよりも、俺も負けはこられない。

白馬だか黒い毛が混じって牛のような馬のモーザーに乗りつゝある
が、
モーザーが急に走り出す。

なぜ？

走行する内にモーザーが
イヒヒーンッ！
といななく。

田の前には木に干してある真っ赤なシーツに興奮したらしい…。

大きく前足を上げて落馬する勇者。

勇者は受け身になり、衝撃に備える。

どっぷんっ！

「どうした？」

泥沼に落ちた…。

うじく臭い。息も出来ない、田も開けたくない。

頭から突っ込んだので足をばたばたさせる。

が、逆にどんどん沈んでいく勇者、静也。

「お兄ちゃん…こま、助ける、じつとこら」

ああ、末っ子の声がある。

「どうやって、引き上がるのだ？」

ジャクソン王子も一緒にいる。

雲はいきなり上の服を脱ぎ始める。

「えっ？おー！…女の子が…」

言いかけてジャクソン王子が田にしたのは、

胸部から腰辺りまでしっかりと繩紐を身体にぐるぐる巻いた雲だ。

その繩紐を身体からほどいて兄の足にしっかりと結びつけ、雲が乗っていた黒馬のキャシーの後足にも結んだ。

「ジャックおじたま、つま、ほしる」

雲がジャクソン王子に言つて、急いで馬を走らせる。

泥沼いや本筋は肥溜めに落ちた勇者を黒馬に乗つた王子に足を縛られ馬に引きずり回され無事救出された。

勇者の静也、糞尿まみれでじばりそのまま馬に引きずり回された

いた。

何かの罰ゲームみたいだ。

その後、風呂に入つても臭く、エヴァンナ王女に消臭の魔法をかけてもらつたが……。

妹達以外、しばらく勇者に近付く者はいなかつた……。

へたれは治らない。こいつの「」と憐れだ。後編（後書き）

勇者としてあるおじき田々しき出来事

『小説家になろう』または『小説を読む』を通じて『』覧の読者様、もし異世界トロリップで勇者が肥溜めに落ちて王子様に助けられる小説がござりましたら、ぜひお教え下さい。

もし同じネタでかぶついたのでしたら、この場をお借りしてお詫び申し上げます。

もし、ぜんぜん良いと仰有りたる作者様でしたらぜひともお友達になつて下さー。

「ついの聖女、覆面？B・マンガ作家になる

「できたよ～。」

そう言つたのは、目の下にくまを作り眠そうな顔をした残念な美少女のことこの国の聖女、静華だ。

彼女は創作活動開始から7・2時間1分1・2秒経過して50ページのB・マンガ本を一本書き上げた瞬間の一言だ。

1分1・2秒！記録新更新。

「後は零、たのんだにやり～」

ばたんっ。

聖女がベッドに倒れた。

眠っている。

そつとしておーひ。

次の日の朝、聖女は寝ている。

そして、次の日の朝も聖女は寝ている。

また、次の日の朝も聖女は寝ている。

やっと次の日の朝、聖女が目を覚ました。

ええ、それはもう寝ましたとも

「ああ、良く寝た」

たつぶじと。

静華の顔色はすこしく良くなつて、田の下のクマもなくなつてゐる。

ぴちぴちの女子高生に戻つてゐる。

「あれ？ 雪、服変わつたね。どうしたの？」

「聖女様の専用侍女見習いになつたの。」

雪の普段着に着ていた灰色のワンピースに白いエプロン姿だったのが、若草色のワンピースに白いエプロンと上品な服装になつていた。

それから、静華の部屋には、花瓶が5つに増えている。

増える花瓶の謎。

「その花瓶のお花、どうしたの？」

「すべて騎士団長さんから毎日、お姉ちゃんのお見舞いにきて置いて
てきます……。」

「アハ、よく頑張ったね。零、ありがとう！」

さすがの静華も勝手に他人をモデルにして書いたことに多少の罪の
意識がある。

兄は別だが……。

「零、それより原稿は？」

「複写紙の呪文でエヴァ先生に200部作ってもらつて、ひとつそり
お城で働く洗濯場のお姉さんやメイドさんに渡した。」

「で、その後の反響は？」

「300部増刷決定！

本日、城下町にて緊急サイン会だよ！」

「やつたー！」

喜ぶ静華だが、

「でも、私がこのまま城下町に下りて大丈夫?」

「大丈夫。はいこれ。サイン会で被つてするよつて、あたし作ったよ。」

静華に零から手渡されたのは、2つのお面。

1つはふくよかなおかめのお面。

もう1つは狐の可愛いお面。

末っ子の無難で可愛いお面だ。

静華は本日より狐の可愛いお面と金髪のカツラを被つて城下町でひとつそりとサイン会を行なつたのだか……

増刷されたマンガ本はものの5分足らずで売り切るといつ売れ行きて、さらに増刷が決定した。

聖女、静華のB-Lマンガ本作家として異世界での活躍は素晴らしい
第一歩となつた。

聖女付き侍女見習いと騎士団長の攻防 前編

「ん、んっ。

扉を開けるとそこには零が一番会いたくない人

アデイストリア公国第一騎士団長、ランスロット・ハーバードがいた。

「えっと、あなたは…先日の舞踏会でエヴァンナ王女といらした…お嬢さんですね。」

名前忘れられている…。

「はい」

「聖女殿は今、お会い出来ませんか?」

「聖女様（お兄ちゃん）は、入浴中。出来ません。」

ある意味真実を語っている零だ。

肥溜めに落ちたばかりの勇者が入浴中だ。

その前にきちんと近くあるに人があまりいない池に放り込んで置いた雲だ。身内には容赦がない。

鈴木三兄妹は同じ部屋といつても大きい部屋と小さな部屋が繋がつており、さらにトイレと風呂がついた部屋と一緒にいるのだ。

本来なら別々の部屋になる予定だったのが、言葉が分からぬ末っ子の雲が寂しくないように国王が配慮してくれたのだ。

「騎士殿、おかわ（え）りくださー。」

「そうですね、それでは口を改めて伺います。あとこれはお見舞いの花です。」

そう騎士団長は雲に花束を渡し、頭を手で軽く撫でて、笑みをみせてそのまま立ち去つていった。

しかしながら、後頭部のタンゴブはまだ治つてないみたいで申し訳ないと雲は心の中で謝ったのだった。

次の日の同じ時間帯。

「一月、ヨーロッパ、田舎のトーンをお願い。」

姉の静香は妹兼アシスタントの零にこう。

「はい

妹の零は姉のアシスタントを二年程前から手伝ひよう仕込まれたのである……。

が、残念なことに君の妹は腐女子ではない。

専門的知識や18禁を抵抗無く平気で読んで育つたため勘違いされやすいが、ノーマルである。次いでに兄も。

鈴木三兄妹の長女、静香だけがブラックでティープなアウトアブノーマルに育つてしまったのである。

鈴木三兄妹の父、健太郎と良く似ている。

親子で犯罪すれすれなことをしでかすので、いつも不安だ。

「こん、こんつ。

扉をまたしても叩く人物が居る。

この部屋に辿り着ける人物は部屋の主と王族のあの3兄妹と宰相のルイズラムと第一騎士団長のみ。

あとはこの部屋 자체に魔法がかかっており、一度部屋に入つたことがあるものか、それを許されたものにしかこの部屋に辿り着くことが出来ない。

創作活動中の姉は、全く聞こえていない。素晴らしい集中力だ。

兄も今いないので仕方なく零が出るしかない。

一回目の攻防戦が始まる。

「「人にちは、騎士殿。聖女様はぐんざ（勉学）に、はげ（ん）でいます。」

誤解を招くような発音はイマイチ云わるのか？

「…………そうですか……」

云わりなかつたようだ。

「あの、お邪魔してしまつたようですが、聖女殿にお会いできるまで中で待つ

「で、出来ませんっ！」

やばいです。アナタが主人公のマンガ本を書いてるのがバレてしまつ。

これはまだ鈴木家の兄妹とエヴァンナ王女のみが知る極秘事項……。

すると、ランスロットは白い高級なハンカチを取り出して零の頬を拭つ。

「お嬢さんのお顔に黒いインクがついてましたよ。

「あ、危ない！」

マンガを書いてる時に落としたインクだ。

ハンカチのハンスロットに手にとって、

「洗つて、忘れます。」

「……？、洗つて渡して下さると？」

「はい」

今は上手く伝わらなかつたよつだが、理解はしてくれたよつだ。

洗つたら、こまだに臭い匂いを残していた兄の為に、用意して貰つたお番でも使ってお返しちよつと想は思つた。

「これをお貸し下さい。」

騎士団長は小さな紙に包んであるものを開いて差し出した。

「あめ？」

「ええ、そうです。口を開けて」

言われるまま、飴を零の口に持つていき、いろいろと飴が零の口に入った。ランスロットの人差し指が零の唇に軽く触れる。

「あまいっ」

「そうですか。それは良かつたです。お嬢さん。」

「こり笑顔を見せる零で、騎士団長はまた零の頭をぽんっと手を軽く置いて撫でた。

「それでは、これを聖女殿にお願いします。では失礼します。」

「はい」

ランスロットは零に花束を渡すとその場を去つていった。

「ああ、良かった。と、頭のタンゴブの腫れがだいぶ治つているのを確認してほつとした零であった。」

＊＊

聖女の静華が眠りこける前の姉と妹の会話。

「といひでお姉ちゃん、騎士団長をもつてどういキャラかな？」

「うへへんと、そうね。天然のタラシかな？あと好きな男ができるば、一途ですぐ情熱的になるの！」

「ふへん。なるほど、なるほど」

気を付けなければなるまい。

姉のモデルキャラ設定はほぼ当たる。（男が好きになるのは全部外れるが）

なんたつてエヴァンナ王女の許婚なのだから！

兄の一の舞にならなによつにあたしがしつかりしないとつ！

そう心に決めた霊であった。

聖女付き侍女見習いと騎士団長の攻防 中編

金髪碧眼の美少女が麗しく本を読んでいる…。

タイトルは、

『月影の蜜事』^{つきかげのみつじご} いけない恋のはじまり』

作者 ジュリエット・シャーロック

「……まあっ！、素敵でしたわ。お兄様は受け身、ランスロット様…違いましたねオスカー様がまた情熱的に自然と攻め行くといふ…月明かりの下、一人が交わす秘密の口付け…萌えつとはこのことなのですね！生まれて初めて味わう感情なのでまだじきじき致しますわ。」

これが読み終えた感想だ。

彼女こそこのアディストリア公国の中王女にして月の精靈に愛されし巫女姫なのだが…、

今読んでいた物は、自分の実の兄と許婚がモデルになつている…。すでに腐王女になりつつあるエヴァンナだ。

「ところで、シズクはこの原稿をいつもどうあるのですか？」

「『パル』でした。」

Hヴァンナの教え子の靈は言つ。

「『パル』とは?」

飲み物になつてます。

「はい。『パル』とは、同じものを『呑』ります。」

「それは、この呪文でどうじょうか?」

【

呪文を唱える、Hヴァンナ。

すると、近くにあつた紙が浮き上がり、一枚田の扉絵と重なつて絵
が浮かび上がる。

「すいじつー・エヴァ先生」

「これは複数の呪文です。これで『ページ』と同じ作用ができるかと思つのですが？」

「はい、出来ます。」

「では早速、いくらでもつべつまじょひね。シズク」

エヴァンナの瞳の奥がメラメラ萌えていた。

「……100から200部くらいでいいです。……エヴァ先生。」

エヴァ先生は完全に腐女子だと零は思った。

* *

複写の呪文で完成した200冊のマンガ本を自分の住まいの部屋に運

び込んだ霊とそれを手伝わされた兄の静也。

「ん、ん。」

また…、あのランスロット騎士団長だらうつか。

今は部屋に入れたら非常にようしくない状態だ。

兄の静也はあの出来事をまだ引きずりしているのか、

「俺は居ない」としてくれば…

と言い、顔色が真っ青になつてゐる…。

兄はある魔法のカラクリ壁に可哀想なので隠して置いてく。

息をのんで扉を開けた。

「じんにじま、騎士様、ただいま、聖女様はお休みです。お帰り、

くだされ。」

かなり異世界の言葉が堪能になつた零。

「ほんにちは、お嬢さん。聖女殿はお休みですか…。」

残念そうな顔するラムスロット。

女の子だったら、その整つた顔に憂い帯びた表情は乙女たちの心を
グッと掴むのだが、零は乙女だが、今は腹と背にかえられない状況
にいて必死だ。

「それでは、勇者殿はいらっしゃい」

「勇者様は居留つ……こゝ居ませんつー今洗濯中です。」

「……勇者殿は自分で洗濯を?」

「してません。あたちが洗つてまする。」

何だか会話がずれてきている。

「お嬢さんとは一体」

「あたしはお世話をしますー。」

「…ああ、侍女なのですね」

「は、はこつー。」

「…それでは、お嬢さんこれを」とハシスロットの手から花束を奪つよつと/or/>の場を上手く収まつさうだと女堵する。

「…それでは、お嬢さんこれを」

「聖女様に忘れます。失礼します。」

とハシスロットの手から花束を奪つよつと/or/>の場を終わらせ離れたい零だ。一刻も早くこの場

「お待ちかねでござる。お嬢さん、これをお召しめ」

引き止めの言葉に、惑ひがランスロットの手には沢山の飴が入った瓶を手にしてくる。

「これがあたしに?」

「ええ、昨日壇上でしたので、食べませんか?」

「たべるー」

「えいわよ。」

ランスロットは零に飴の入った瓶も渡すと、また、零の頭に手を置いて頭を優しく撫でると、その場を去つていった。

今日も危なかつた!

でも、何で毎日来るんだろう?と思つだつた。

聖女付き侍女見習いと騎士団長の攻防 後編

そこには、一冊のマンガ本が置いてある。

「これって、ランスロット様とエヴァンナ王女様じゃない？」

一人のメイドさんが読み始めた。

想像して見て下さい。

「ええー。男の子だったのー！」

「あつ、え、うつうそー、抱きしめて…月明かりの下で影が……」

「…美少年と美青年つて絵になるわ、これは他の娘にも見せなきや
ー。」

このメイドさんの掴みは良じよつだ…。

本日、100冊をエヴァンナと雫の手に寄つて秘密裏に城の女子達

に配われた。

* *

騎士達が今訓練している訓練所。

一人の小さな女の子が物珍しそうにきょろきょろしている。

若草色のワンピースに白いエプロンに焦げ茶色のお下げにぐるぐる
瓶底眼鏡をかけた女の子だ。

この場所では目立つ存在だ。

小さな女の子は誰か探している。

騎士や従者に剣の指導をしている茶髪の青年を見付けると近付いて
いく。

目的の人物を見つけたようだ。

ここには珍しい小さな女の子に剣の指導をしていた青年もすぐ近くにその存在に気付いて視線がある。

「皆、しばらく休憩だ。キール、後は頼む」

「え、アタシが？解りましたよ。またアナタ、今度はずいぶんと可愛い女の子をたぶらかしたのね。イケナイ子ね。」

そう紛らわしい発言をしたのはこの第一騎士団の副団長のキールだ。

「いや、違う。あの子は異世界から来た勇者と聖女の可憐な侍女さんだよ。」

「へえ、あの子が肥溜めに落ちた勇者の……ね。」

「…ああ」

二人とも微妙に勇者に対するイメージが壊されてしまった被害者だ。

騎士として勇者は憧る存在！それが……

勇者が可哀想なのでこれ以上は辞めよ。

茶髪の美青年、IJの国的第一騎士団長、ランスロットは小さな女子に寄つていく。

「IJさんにちは、お嬢さん。今日はあなたから来て下さったのですね。

」

「IJさんにちは、騎士様。今日はIRE、あなたに…渡すです。」

そいつ言った少女の手には白いハンカチが差し出されている。

先日、ランスロットが零に貸したハンカチである。

ハンカチを受け取ったランスロットに零は言ひつ。

「騎士様、もうお見舞い来ないで下さい。」

「こきなりどうしたのですか？」

「騎士様と聖女様、へんなウナギです。迷惑です。」

「… そうですか？、残念ですが、私は諦めるつもりはありませんよ。」

「なぜ？」

「解りませんが、このまま私を襲つた犯人をこのまま伸ばしにして置くわけいけない気がして…」

その言葉を聞いた侍女見習いの少女は青ざめる。

犯人はあたなのすぐ目の前におりますが…。

あれは緊急事態で仕方なく殴つてたのだ。

「でも、王様がもう大丈夫だつて、言つた。だから、もうお見舞い

来ないで下さい。」

そう言ひて、櫻は早速その場を去つていった。

*
*

そのままの夕方。

じふ、じふ。

二つの青年がやつてきた。

つい一また来たと櫻は思ひながら、仕方ないので扉を開ける。

「騎士様、聖女様はお休み中で、勇者様はいらっしゃいませんが、中へどうぞ。」

「…よろこびですか？」

「はー」

今日は魔法のカラクリ壁にすべて例の物を隠してある。

中に入ると応接できるような一人掛けのソファとテーブルのセットに奥には大きなベッドがあり、黒髪の少女が眠っていた。

ランスロットはやつと会えた少女に近付いて顔を覗き込む。

すると、ランスロットは黒髪の少女こと聖女の静華の黒く真っ直ぐで美しい髪に触れる。

お前、お姉ちゃんに近付き過ぎやつー事がそつ口にじかけた時…

「んつ、ランスロットさん、まあ…」

姉の静香が寝言をいいランスロットの手が、静香の顔の近くにあつたので、自分の頬に手を擦り寄せたのだ。

「ん」ほおんー

大きな咳払いをする零。

その咳払いにびくつと零の方を見たランスロット。

「もうお帰り下さいませ、騎士様。」

「あっ、はい…」

零はランスロットを急かして部屋から追い出した。

あのシチュエーションはたしか変態のお父さんが『こいつ寝顔で自分の名前を呼ばれて頬擦りでもされると男は皆、どつきゅんって心を揺さぶられてオオカミさんになっちゃうから気を付けるんだぞー』って言っていたのとまったく同じだ。

あたしあまり良くないフラグ立ててしまつたと零は一人悩んでいた。

今回もちやつかり花束を置いていったランスロットであった。

* *

その頃、静香の夢の中では…

ジャクソン王子とランスロット騎士団長が…

ピ　　を啄むように食りあい。

ピ　　をピ　　に挿入した。

激しく愛し合う二人。

次の日の朝、ジャクソン王子はランスロット騎士団長の自分の頬を手にし、優しく頬擦り愛しい人の名を呼び…。

B-L万歳な姉の静香の夢だ…
きっと次の話のネタになるだろ、つ。

次の日また同じ時間帯だ。

* *

零は明日のサイン会の手配とお面を作り終わって安心していた。

しかしながら、何故零が世の中の半数の男性が怖くて読めない敵に回すようなマンガ本を売ろうとしているのか不思議に思う人がいると思う。

それは姉の静香が大好きだからだ。

姉の静香が大切にしているものを壊したくないし、受け入れている。だから、自分ができる範囲で手伝ってしまう。

普段から仲の良い姉妹（兄は？）なのだ。

姉の喜ぶ姿が好きなのだ。

こん、こんつ。

また…。

仕方なくべぐる。

「 」んにちま、騎士様。」用件は?」

「 」んにちま、お嬢さん。今日はあなたに贈り物があります。」

「あたしに?」

「はー」

すると、ランスロットは膝をついて零の焦げ茶色のお下げに青いリボンを結わえる。

「 良くお似合こですみ。お嬢さん。」

「 ありがとうです。騎士様。」

「 騎士様じやなくて、ランスロットです。」

「 うんすうじ様? ですか?」

「 ええ、お嬢さんのお名前は?」

「聖女付き侍女見習」一弓です。」

「……それは、ダメです。」

なんですか！

「えーと、エヴァンナ王女の教え子のA子です。」

「……きちんと教えは頂けないのでですか？」

「初めて会った日に、エヴァ先生から紹介して貰つたはずですが…」

「…………モズク？」

「失礼します！」

雪は勢い良く扉を閉めた。

モズクはないだろ？、海蘿はー…と雪は思つた。

しかし、カツラのお下げに結つて貰った青いリボンは嬉しかった。花束はまた貰つたのだが、やはり聖女の兄か姉宛なのか知らないが、そつ思ひうと胸の奥がきゅうと痛むは何でだらうと雪は思った。

* *

次の日、同じ時間帯。

今日は兄の静也が一人でいた。

妹達は城下町でサイン会だ。

兄の静也は毎日、朝は合氣道（護身術）を末っ子の妹に習い、午後は乗馬（キャシーしか乗れないが）や体力つけるべくジョギングをしていた。

今日もジョギングでかいた汗を風呂で流し休憩していた所だ。

「ん、んつ。

妹達が帰ってきたのかと静也は思い、扉を開ける。

「おか、わりくださー…」

前にも聞いたことがある言葉。

トヤリには、ランスロットがいた。

これが本当の意味での勇者と騎士団長の初対面だった。

思つたよつも長くなりました。

お付き合つてゐるがといひざいます。

初対面！

ここに、固まる人物が居る。

この部屋の主、勇者の鈴木 静也（一七）がとある人物を見て固まつていてる。

その人物こそ、アディストリア公国的第一騎士団長、ランスロット・ハーバード（二五）なのだが…。

花束と甘い焼き菓子を手に部屋の前に立っていた。

男同士見つめ合つ…。

「こんにちは、いつもの小さな侍女さんではないので驚きました。」

「ああ、雲のことか。」

「…シズク。」

「雲が何かしたか？」

「いえ、小さいのに偉いなど。」

「そんなに小さいか？ 霊はこくつに見える。」

「6、7歳位でしょうか？」

「……そつか。」

「今のは末の妹が聞いたら、ある意味ショックを受けるに違いないだ
うつ。」

妹の実年齢を教えてやるつかと考えていた兄の静也。

「アリ言えば、あなたは聖女殿（静香）の兄上でしたね」

「ああ、妹（雪）から話は聞いてる。いつも見舞いに来てるって、
第一騎士団長のランスロット・ハーバードさんだよな。」

「私のことをじ存じでおこででしたか。」

「ああ、すでに会つてゐる一人。」

「とりあえず、せつかく来ててくれたんだし。今、妹いないけどお茶
くらへ飲んでいくか？」

「ええ、是非。」

部屋の中に入るハッシュロット。

「とつあえず、もういら辺に座って、今はお茶出すから。」

そう言ひて、静也は慣れた手つきでお茶を入れ始めた。

がちゃつ！

「「たつだいまあ～」」

元気良く、妹達が帰つて來た。

「あれ？お兄ちやんと……？」

聖女の静華は見馴れない客人を田にして思わず裾の長いスカートを踏んづけてよろめく。

静華が倒れそうになるのを抱きとめるランスロット。

静華はランスロットの腕の中にいる。

静華はランスロットの意外にもしつかりと鍛えられた厚い胸板に抱きとめられ、少し興奮する。

「大丈夫ですか？聖女殿。」

さらりとそのぐつと腰にくる美声で耳元で尋ねられ顔が真っ赤になり、

静華とランスロットの視線が合つ。

つうーと静華の鼻の下から赤い液体が流れ落ちていく…。

ああ、ランスロットの服にまで鼻血がついている。

静華の鼻血放出だ！

テクニカル大ヒットだつ！！

説明しよづー

姉の静香は、好みの美少年や美青年を見ると脳内妄想がヒートアップし激しく萌え尽きてしまい処理しきれなくなってしまう。
そこで鼻血を放出してしまつのである。

「あー、とりあえずベッドに俺が静華を運ぶから雪は騎士団長の風呂の支度頼むな。」

「はーい」

この場で一番、冷静なのは兄の静也だ。

さすがに妹の対処に慣れている。

ランスロットの服には無惨な鼻血の後がべつとつこてしまつて
いる。

他の人が見たら大怪我をしてると大騒ぎになるくらいだ。

* *

仕方なくこの部屋で風呂で入ることとなつたランスロットだった。

ランスロットは今、勇者と聖女の兄妹の部屋にある風呂に浸かっていた。

何故こんなことになつてしまつたのかランスロットは思った。

初めて会つ勇者は青年というほまだ少し若い少年だった。

実際、会つてみたが打ち解けやすく好感が持てる少年だったし、冷静で判断ができる落ち着いた所もある。

逆に聖女は身体が弱いよつた病氣がちで伏せつてゐるみたいだ。

鼻血もそのせいだらうか。

と、湯船からあがりつとしていた時に…

「騎士様、お背中でも洗いますかー」

風呂場に入つて来た雲。

ランスロットは思わず雲の顔をじいつと見つめている。

「……しゃ、しゃしゃ

「獅子舞い？」

雲がツツ 「//」を入れた。

「…シズク、ですか？」

「はい」

「えっと、いつも眼鏡は外していましたのですか？」

「湯気で眼鏡が曇るので外しますが何か？」

「い、いえ。何でもあります。もうあがりますので、大丈夫です。

」

「そうですか？では何かありましたら、お声をかけて下さい。」

そう言い残して、零はその場を去った。

びっくりしたいつもの小さな少女の素顔を初めて見たが、とても愛くるしく、ランスロットが想像していたより可愛いかったのだ。

思わず、見とれてしまひへりこ「ランスロットを見て…

今自分がどうこう姿でいたのか思い出した。

生まれたままの姿を少女に曝してしまったとランスロットは思い、

赤面した
。

変化する勇者の剣

「お兄ちゃん、準備はいい?」

「ああ、こいつでもかかつて来い!」

「でやあっ!」

末っ子の勇ましいかけ声で正面から技をかけてきたが……、

「あれ?」

零は兄の静也によつて腕を返され、手首と肘、肩が極めて倒されて一教が見事に決まつっていた。

「やつた…?」

自分でも信じられないが末の妹を倒したのだ。

「強くなつたね。お兄ちゃん。」

「ああ、やつじじよめでたか…」

静也は「」数日のことを思い出した、数百回に及ぶ妹に投げ飛ばされ続けた記憶が走馬灯のように流れ…

ああ、何か泣けてくるのは何故でだらつか。

「お姉ちゃんも3日で基本的な技、覚えたんだよね。」

「ええ！ 静華が？ なんでもまた…、もしかしてあれのためか…」

「…うん。鬼畜俺様系の服従奴隸もの描くためとかで…」

「……。」

「……。」

「さすがのあたしもそれは手伝つてないし、読んだことないよ。なんか怖くて…。」

ああ、良かった。霧はまだあれじやなくて、お兄ちゃんは安心しました。

それより、静華はどんどん遠い世界の住所に既になってしまってたのかと思つとお兄ちゃんは知りたくなかつたです。

兄は妹の静華の将来を考えるとまた何故か泣けてきた…。

朝の稽古の内緒の鍛錬場から（アラジン国王陛下が特別に用意してくれた室内場）自室に戻ろうとしていた時、エヴァンナ王女と会つた。

「おはようございます。シズヤ様、シズク。」

エヴァンナは天女の如く美しい少女でこの世界に鈴木三兄妹を召喚した張本人だ。

「「おせむりへ」」ぞこめす。」

一人そろつて挨拶する。

「シズヤ様、本日はおめでと「」ぞれこめす。レベルが一つ上がつて
おりました。」

「本当ですか。」

「ええ」

喜ぶ静也にエヴァンナが言づ。

「もしかしたら、勇者の剣に変化が御座しませんでしたか?」

「今日はまだ、これから確かめて見ます。」

そして、静也達は部屋へと移動した。

* *

自室にて鈴木三兄弟とH'アンナが勇者の剣の変化を確かめ為に見
せぬ。

2週間程前に『竹光』といつもの引き抜いた勇者が今こじて試さ
れようとしている。

静也は息を飲んで勇者の剣を手にし引き抜く。

かちやつ。

音を立てて引き抜いて剣がその姿を現した！

「まあー見たことない形ですわ！」

エヴァンナは感嘆の声をあげる。

確かにこの世界では見たことないと思つが…、

日本人ならば一度や一度、テレビで見たことがあるものだ。

特に時代劇などで。

その剣を見た鈴木三兄妹たち。

「えつと、お兄ちゃんって勇者だよね…？」
と静華のコメント。

「…一応。」

ぼそりと呟く兄の静也。

「うん、でもこれ。武器にも補具にもなるね。防具にも短棒術とか柔術でも使えるよね。」

と答えた雲。色々なヒントをありがとしつ末っ子よ。

もうお分かり頂けただろうか。

変化を遂げた勇者の剣はなんと…

『鋼鉄の十手』だった。

今ここに、新たな『十手術の勇者』が誕生した瞬間だった。

英雄王と龍の涙

アーティストリア公国
おとぎ話『英雄王』

むかし、むかし。

このくにのおひでまはにんげんをたべたり、おせつてくる まごく
をたいじするためにつびにしました。

いちばんたかいやまにのぼり、おおのくびをついたおひでま
はそのくびをもちかえりくにのはんえいとかからあかしにかみさ
まこまつられました。

おひでまはくにのためにはたらいたえいよとたえて、たみからは
『えこゆひおひ』とよばれるよつになりました。

* *

集まつてこれから『魔族保護』の話し合いを執務室で行われようとしていた。

もう一人呼ばれているものがいる。

トン、トンッ。

「入れ」

アラジン国王陛下が言い、執務室の扉が開かれた。

訪れた人物はランスロット第一騎士団長とキール副団長だ。

二人ともいつもとは違う様子を感じていた。

「陛下、私達をお呼び立てしたご用件は?」

ランスロットが单刀直入に言つ。

「ああ、お主達に極秘任務がある。これから異世界から来た勇者と

供に隣国の人タリーナに向けてもらい、ある場所に魔王の子が捕まり売られたと情報が入り、その魔王の子を保護し「この城へと連れて参ることだ。」

アラジンは簡潔に用件を述べる。

「何故、魔王の子を救おうとなるのですか?」

「それは、私がお話致しますわ。ランスロット様」

エヴァンナが答えた。

「私たちの父、アレキサンダーが魔王の首を切り落とし、この国に持ち帰つたことは、国民の全てがご存知かと思います。」

「ええ、アタシ良く知つてゐるわ。『英雄王』はおどか話として有名よねえ?」

副団長のキールが言ひ。

「はい、英雄王は先王がモデルとなつたおどか話ですが、魔王を退治した眞実は全く違うのです…。」

エヴァンナは話し続けた。

「龍の流す涙には不老長寿の効果があると代々言い伝えられていました。

父は病氣がちで身体の弱かつた私達の母、リーナ王妃の為に龍の涙を魔王を探していました。

当事、卵を産んだばかりの魔王の龍を父は殺し、わずかに流れ落ちた龍の涙の一滴を手に入れて母に飲ませたのです。」

エヴァンナは少し辛そうな表情だった。

「随分と英雄王の話しど違うだろつ。

当事は兄上を身籠つていた母上は出産で命を落とすかもしれないと医師に宣告されていたのだ。

父上は母上や兄上の命を守りたい一心で龍の涙を手に入れて、母上は元気になり、兄上や僕、エヴァンナが生まれたが10年前に母上はなくなつた。」

エヴァンナの替わりに話を続けたジャクソン。

王妃リーナは10年の延命をし、行き長らえた。その際、老いや病気は一切なかつた。

「しかし、余や母上が助かつたその後が父の功績を真似て、魔族狩りが流行りだし魔族の数が激減に減つていった。

魔族に対して人間は酷い行いをしている。

そこで余は異世界から三兄妹の召喚を妹に頼んでもらつた

最後にアラジンが語つたが、

「「三兄妹?」」

二人の騎士は異世界から来た勇者達の兄妹に声を揃える。

「ランスロットは実際に3人に会つたとエヴァンナから聞くが…」

（あら、どうしましよう。忘却の魔法で必要な情報まで吹つ飛んでしまいましたのね）

「すみませんでしたわ。私としたことがランスロット様にはシズクのことをシズヤ様とシズカ様の妹と申し上げておりませんでしたわ」

素直に謝るエヴァンナに一人の騎士の視線が末っ子の雲へといく。

雲は視線から避ける為に兄の後ろに身を隠した。

（ああ、お兄ちゃんを頼ってくれるのか）

静也は内心、嬉しく思った。

静也は妹思いだが、シスコンではない。絶対にありえない。特に静華に対しては。

だが、副団長のキールが近づいて雪をがばりと密交に締めにした。

「ちっちゅく、可愛～い！アタシ、カワイイのダースキなの。
ほっぺたもすべすべのふにふにでもしゃぶりつきたい」

紫がかつた金の長い髪を後ろに艶やかな花の簪かんざしでまとめて瞳は夕焼けの日が沈む寸前の紫と赤が混じりあつた不思議な色だ。容姿は男か女か迷つほど妖艶で色っぽいが男である。

雪はそんな男に行きなり羽交い締めされ、自分の頬を相手の頬に擦り寄せられて完全に混乱している。

「い、やあっ！」

雪は技を使った。

「うわー。

キールは見事にキレイに投げ飛ばされた。

雲のレベルがまたひとつ上がった。

ちなみにキールはロココソではないカワイイものと子供がただ好き
なだけなのだ。

「あの、『めんなさい』

投げ飛ばした相手に謝る雲にキールは、

「いーのよ、びっくりさせやつたアタシのまつが悪いわ。ごめん
なさいねえ」

キールはいい奴だ。

「しかし、魔族の子を捕まえどつするのですか？」話を戻したのは召喚された勇者の静也だ。

「それは、魔王の子の中には人語と魔族語を理解し話す者がいるからなのです。」

ルイズラム宰相が言ひ。

「本来、魔族と人間は話す言葉が違うのですが、魔王の子には人間との間に生まれた者がいるのです。」

「それで、魔王の子を探し出す。必要があるんだな」

静也は魔王の子を探す必要が解り納得する。

「今回の旅の目的地であるエタリーナには私と勇者殿と騎士のランスロットかキールと向かう予定です」

「私と零は？」

「今回は女性や子供には危険な所ですので、勇者殿だけにご同行し

ていただきます

「それでしたら、お願ひがあります。」

「なんでしょうか？」

ルイズラムが言つ。

「植物研究園での入室許可と植物の採取をしたいのですが宜しいで
しょうか？」

静華の願いにルイズラムはアラジンをみていいだろうと視線を送る。

「いいでしょ」

国王陛下から宰相を通して許しを得た。

「あつがとうござります」

静華はこつこつ笑顔を見せる。

(今日は大丈夫だよ。お兄ちゃん)

(本当か?)

(うん)

今回の姉に黒いオーラがない。

雪のこの勘は外れたことがないので、安心した兄の静也だった。

* *

ここはアディストリア城内の植物研究園である。

様々な植物があり、観賞植物から医療薬草、食物の品質改良など幅広い目的で植物の研究が行われている。

静華と雲が旅立つ兄の為に薬の材料を探り来た。

「あっ、これがキズとヤケドに効く塗り薬のキズアトノコサズ草ね！」

静華が名前が描かれた草を見付けて摘み取る。

「お姉ちゃん、これ、トリハダ サミシイ根で読むのかな？」

雲は近くにあった植物の名前を読みあげるが…

「ヒトハダ ロイシイ根だよ。」

静華は興味を持つたようだ。

「でもお兄ちゃんとお姉さんはすごいね。

こっちの世界の言葉もペラペラだし文字もスラスラ読めるんだもん。どんな感じなのかな？」

雲は今まで不思議に思っていたことを静華にきいた。

「んーとね、言葉になると難しいね。

言葉は本当に自然に日本語で話してたかと思つてたから、靈に言わ
れるまで気付かなつたし、文字も自動翻訳されて不思議なのよね。」

「そつかあ、いいなあ。私ももっと文字読めるになりたい。」

およそ半円ほどで日常会話が出来る靈の順応性の高さにお姉ちゃん
は逆にすうじこと思いますが‥。

「でも気になるね。ヒトハダ コイシイ根つて一体どんなものなん
だろうね？」

と靈がその植物を指をして言つ。

「うん、うだね。」

「引き抜いてみようか。」

好奇心旺盛な二人は、ヒトハダ コイシイ根の長い葉を掴んでずぼ
つと引き抜いた。

「いや～ん

「「……。」

そこには、人参に似た橙色に一又にわかれた根っこが声をあげて姿を現した。

腰をくねらせているかのよう見える…。

「この根っこ何に使うんだうう…。」

「図書館にある本でなんか見たことがあるかも。せつかくだし、後で作ってみようね。」

「うさ

二人はその後いくつかの薬を作った。

そして、あのヒトハダ コイシイ根を使った薬のレシピは残りの材料に唐辛子と鷹の爪とフカヒレに燕の巣とトカゲのしっぽをすり潰して煮詰めて完成した。

『**性命欲協力増幅液**』

効用：性欲と生命力を高め増幅させる

備考：一滴で効果抜群

二滴で中毒者爆発

三滴で限界致死量注意

薬と毒、紙一重の取り扱い注意の薬を一人は調合してしまい、レベルアップした。

兄に念のため持たせがどこかで役に立つ日が来るだろ？…

きつと。

番外編 エヴァンナ王女の昔話（前書き）

エヴァンナ視点です。

10年くらい前のお話でエヴァンナが4～5歳位です。
ランスロットは15、6歳です。

番外編 ハヴァンナ王女の昔話

あたくしのお母様が亡くなりました。

お父様はお母様のお側を離れよつとしません。

いつも仲の良かつたお二人です。

あたくしはお父様が泣いているのを初めてみました。

お母様はやににただ眠つてこるよつじか見えません。

あたくしはお母様を起しせばやうと田を覚まして下さるはずです。

「お母様、お母様、起きて下さご。お母様」

「ハカア…、もうやめやうせ。母上は死んだんだ」

「死ぬとは? お母様はもうやうと田を覚まさないことなのですか?」

一番上の兄のアラジンはまだ幼い4歳の妹が母の死をまだ理解しきれていない姿を見るのが辛い。

「お母様の手、とても冷たいですわ。あたくしが手を繋いでいれば

お母様は寒くないですわ

お母様の手は氷のように冷たいです。あたくしが温めればお母様も
あつと寒くないですわ。

「エガアンナ、もうよー。リーナは天国にこったのだ。もうよー。」

お父様があたくしの手をお母様から離して言いました。

その後、お母様は田を覚ますことあつませんでした。

あたくしはお母様にもう前を呼んでもうひとつも微笑みかけても
らうとも抱きしめてもうこともないと知りました。

* *

あたくしは、次期巫女姫としてお城を出て大神殿に暮らすようにな
りました。

巫女姫とは代々アーディストリア公国の領土を魔法の防災で作り災害や日照りがないよう管理し、王に報告する役目を担う魔力の素質が高い女性が受け継いでいた。

巫女姫は王族の者もいれば民の中から選ばれるもの様々である。

巫女姫の年齢は10歳前後の歳から現巫女姫から魔法を学び3、4年後に巫女姫の座を譲り受けるのが通例だった。

しかし、先代巫女姫は亡きリーナ王妃であつた為、急ぎよ母と同じ高い魔力と月の精霊の加護がある娘のエヴァンナが選ばれた。

エヴァンナは笑うことを見失してしまった。

お母様が亡くなつて半年が経ちます。

あたくしはお母様の後を次いで立派な巫女姫になります。

ときどきお母様を思い出して夜一人で泣いてしまいますが、お父様やお兄様たちがいますので寂しくないです。

* *

ハーバード家には変わった家訓がある。

『初めて見た裸体の異性を妻に持つこと』

女性に対しての敬意と尊重を重んじているのだが…

ランスロットは今、非常に困っていた。

「ランスロットさまあ～。」こちらを見てください

大神殿の庭園の木陰の近くで従者の少年が同じ歳のメイドに襲われていた。

「ラソスロットは田を暝り必死で相手の姿を見なによつてゐた。

その頃、エヴァンナは大神殿の庭園で花の冠を作っていた。

何か木陰からうるそ声が聞こえてくる。

エヴァンナはじつに近づいて覗いてみた。

そこには、従者の少年が押し倒されてメイドに襲われてる……。

あらあら、どうせしょ？

これは助けるべきでしょ？

最近の女の方はとても積極的ですね。

お胸を堂々とさらして殿方の胸板に押し付けありますわ。

殿方はぎゅっと田を瞑り必死で引き離そうとしておいでですか。

ああ、見事に食われるとほいのいとですわね。

唇を奪われておひますわ。

「んー、んんー」
やめてください。

「ウンスロットれまあ、何故こりりを見てくれだせりなこのへ.

ランスロットは今、非常に困っていた。

この状況をなんとかしたい一心だ。

初めて女性に言ふ寄られて、どうしたらよいか解らな。

しかし、ひとつだけ異性の裸体だけは見てはいけナイ。

どうじょひ、幼い頃からの家訓が頭の中でコピーしてこる。

「やのへりここじてあげたら如何でしょつか？」

「えつーひつ姫さま」

メイドがランスロットから離れて乱れた服を直した。

「お仕事はもう終わりまして?」

「い、いえ。し、失礼致します。」

間の悪いことにこの国の王女にとんでもない場面を見られいたメイドはそそくせとその場を離れていった。

ここに残された従者の少年と幼い王女。

「もー、行つてしまわれましたわ。お取り込み中、お邪魔してしまいましたでしょうか。あたくし?」

「いえ、大変助かりました……」

ランスロットはいまだ放心状態だ。

まあ、無理もないが。

氣まずい空気が流れる。

……。

「あの、ありがとうございました。」

「いえ」

……。

「もう大丈夫ですよ」

小さな女の子に慰められた。

知らない内に体が震えてエヴァンナに頭を撫でもらっていた。

エヴァンナは相手をそっと労るように微笑んでいた。

エヴァンナが微笑んだのは、どのくらい久しぶりだらうか…。

* *

現在、エヴァンナの自室でエヴァンナとランスロットが一人でお茶を飲んでいた。

「エヴァンナ王女、今回のエタリーナ行の件なのですが…」

「ええ、辞退したいのですわね？」

「はい」

隣国エタリーナの目的地は大きな花街である。

二人は許婚同士だがそれは形だけであつて二人の間に約束がある。

愛する人ができるまでの偽装の許婚でいること。

「ところで、最近勇者様の二兄妹のお部屋に花束を持って毎日お訪ねになつておいでとか？」

エヴァンナがふわりと微笑んで言つ。

「ええつと、あの…はい」

戸惑うランスロット。

「私に気を使つ必要は一切ござりませんわ。好きなお方ができたのですね？」

「まだ、自分で解りませんが、そつなのかもしません」

「シズカ様ですか？」

「えつ」

…図星のよつだ。

「シズカ様のお好きになつた」きつかけは？」

「気になるH'アンナ、アーティストリアのジュリエット・シャーロックのファンー号にしてファン俱乐部の会長としては気になる。

今後の活動計画に支障をきたしては！

「美しい黒髪やお姿もそつですがお優しい所と歌声でしょつか？」

「歌声？」

「ランスロットはあの日の出来事をエヴァンナに話した。

「……」

「あの、エヴァンナ王女?」

あの日は確か零がお家に帰りたいと大神殿にきて召喚した時に、使つた鏡に体当りしようとして止めましたわね。

推察するとシズカ様はその頃、猛進突破の活動中…。

シズカ様ではありませんわね。

「ランスロット様、シズカ様は今のうちに諦めるべきですわ。あの方はいずれ元の世界へお帰りになりますわ」

「それは、わかつております」

「急にとは、いいませんがシズカ様とシズクには距離を置くべきです」

「…ええ、そのつもりです」

「そのお言葉聞いて、私、安心致しましたわ」

「ランスロット様、お一人のことは諦めて頂きますが、シズヤ様との
「かぶりんぐ」には協力致しますわ。うふふ。

間違いなく腐玉女に落ちていくエヴァンナであった。

勇者の旅立つ日まで

「へへ… やあー。」

カキンッ。

鉄と鉄がぶつかり合ひの音が響く。

「もう少し刀の流れを汲み取るよ！」

ランスロットが囁く。

「はーー。」

再び剣を交える二人。

異世界にやって来てあつといつ間に20日が過ぎていた。

ここ5日ばかり勇者の剣を用いて騎士達の中に混じつて実戦的な訓練をしていた。

「痛つてえ……」

「ちゅうと、ガマンしてよ。お兄ちゃん」

「お兄ちゃんの手にまめ出来てるね」

手に出来たまめが潰れて、妹の静華に手当をしてもうつてこる兄の
静也とその様子を見てくる末っ子の雪。

「お兄ちゃん、結構十手とかすぐ落としたりしてない?」

「…………」

図星のよつだ。

「お兄ちゃんに元気な、プレゼント」

末っ子の零がやつて、静也の前にポケット中からあるものを取り出した。

ふりーん。

ふりーん。

紐ですね？

細い丈夫な紐みたいですが零さん…。

「元の紐は？」

静やは末っ子の零に聞く。

「手裏剣だよ。お兄ちゃん、十手かして」

末っ子の轟はいつも静せから十手を握つて向かい組を十手の柄にじっかり結んだ。

そのまま轟は組を手に通して十手を持つ。

「お兄ちゃん、さあ」と叫びて

「あへ、うん?」

言われるまま、立ち上がる静せ。

「二年生

「えへ、な

バシッ。

「 #£? ?!」

あまりの痛さに声にならない悲鳴をあげる静也。

兄である静也の尻を十手で叩く末っ子の靈。

何かのお仕置きみたいにみえると思つてしまつ静華。

兄はプレゼントとは尻を叩かることなのか?
おにーちゃん、何か悪いことでもしましたか?

11歳の時に一緒に寝ておにーちゃんが火事の夢を見て靈さんのお布団を洪水にしてしまったことをまだ根にもつて足りとか…。

痛さのショックのあまりぐるぐると混乱している静也。

「これ、つけると短くとも長い刀と同じくらいの打撃の威力が増すの。

あと手から離しても簡単に落とす心配しなくてもいいんだよ！」

雲の話に上の兄妹は納得した…。

身を持つて体験させられたんだと。

ただ喋るより実際に叩かれると現実味が違つてくる。

だが、雲は手加減なく子供の力でも十分に威力を發揮していることを教えてくれた。

しかし、静也の尻は猿のようになってしまったため、また薬を塗るはめになってしまった。

＊＊

次の日の朝。

王族三兄妹と鈴木三兄妹、第一騎士団長のランスロットが勇者(い)一行の旅立ちに立ち会つた。

「あの、妹達のことくれぐれもよろしくお願ひします」

勇者である静也は旅立たなければならぬ。

「安心して下さい。シズカ様とシズクのことは御守り致しますわ。(悪い虫が付かないよう)」

エヴァンナが言つ。

「お兄ちやん、これ薬とお金」

静華が袋を渡した。

「ありがと」

静也は袋を確認した。あのB-Lマンガ本の印税のお金と薬がいくつ
か入っていた。

「お兄ちやん、チョーク半分こ！」

何かあつたら書いて、絶対会いにいくからー。」

雲は白いチョークをぱきんっと折つて静也に渡した。

「ああ、元気でなー」とつてくれる

静也はそういう、黒馬に乗つてルイズラム宰相とキール副団長を率
いて旅立つた。

その日はいい天気で太陽がきらきらと輝いていた。

勇者の旅立つ日まで（後書き）

これでお城の生活編が終わり、勇者が旅立ちました。

魔守の森 名無しの龍 1（前書き）

新章突入です。

勇者が旅立つてから1週間が過ぎていた。

今日は静華と零とおまけに護衛のランスロット騎士団長が公式に孤児院の訪問に馬車に乗つて移動していた。

「お姉ちゃん、今日行く孤児院は近くに大きな森があるんだってね」

「うん、なんでも国の天然保護国立指定地域に指定された『魔守の森』でいうんだよ」

「いってみると出来るかな?」

「いけません、シズク。そこは魔族がいてあなた一人では危険ですし、何より一度入った人間は一度と出れないと言われている位に別名『迷宮の森』とも云われているので気を付けて下さいね」

「はい」

三人がそんな会話がされていた。

子供達の様子を見ることや一緒に遊んだりしていた。

孤児院に着いた静華達。

* *

その魔族はいつもその答えを探して『魔守の森』へ来ていた。

『ナゼ、ワタシ二ハ ナマエガ ナイノ?』

その魔族には産まれた時から名前が無く『名無しの龍』として呼ばれ、産まれた山を降りてからは皆から蔑まれ孤独だった。

鬱蒼と生い茂る木々の中で一匹の魔族がいた。

* *

静華はその時丁度、孤児院で一番幼い赤ちゃんをあやしていた。

静華は意外と子守が得意だった。

腕の中によしの赤ん坊を上手にあやしていた。

「あら、雪が近くにいらっしゃった。

「お姉ちゃん、赤ちゃんあやすの上手だね」

「うそ、隣の小窓からお兄ちゃんが隣の外をしてたからな」

「へえ、うなんだ」

「雪がよく夜泣きして泣いてた時はいつもお母さんの子守歌で泣き止んでたけど」

「サイレントナイトだよね？」

「うん、12月25日は雪のお誕生日だからね」

「クリスマスと誕生日が一緒なのはちょっと損した気分だけビ…」

「まあ、いいじゃない。それよりこの子にも歌つてあげたら?」
この間、合唱部でソロで歌つて市の大会優勝したんでしきう。
お姉ちゃんにも聴かせて?」

「えっと、サイレントナイトでこい?」

「ええっ」

雪は歌いだした。

――――――

その歌声は優しく柔らかいがしつかりと辺りまで響き空氣に溶け込んでいった。

ランスロットは別の部屋について子供達と遊んでいた。

聖女殿の歌声が聴こえる。

ランスロットはその歌声に惹かれるよつ静華と霊のこの部屋へと足を運んだ。

すると、ふつとまたしても歌が終わってしまったよつだ。

しかし、ランスロットは赤子を抱いて、優しく微笑む静華の姿を見付けて確認した。

聖女殿の歌をもう一度、聴くことが出来た。

ランスロットは嬉しげに優しく赤子を抱く静華の姿をさつと見つめていた。

初めてこの世界に来た時と同じ、頭の中に聞こへ声。

「あつ、暁。気を付けてね

「お姉ちゃん、ちょっと散歩いってくんな

微かに聞こえた、問いかけの声。

『ナゼ、ワタシ一ハ ナマエガ ナイノ?』

歌を歌つていた瞬間。

* *

教えてあげなくちゃ！

雲は知らず知らずの内に『魔守の森』^{まもりのもり}へと足を運んでいった。。

別名　迷宮の森くとも。

先王の遺産でもつ察していく方もあこと思こますが声を聞くができるのは雪でした。

魔守の森 名無しの龍 2（前書き）

本日、累計PV 10,000 アクセス突破！
ありがとうございます。

魔守の森 名無じの龍 2

歩く？姿はふに、ふに。

立ち姿はふるん、ふるん。

鳴き声？はぴよ、ぴよ。

濡れた瞳は黒く潤んで見た目はふるふるのつるつるの黒いスライムちゃん。

零は生まれて初めて魔族？と遭遇していた。

一人で森に入つていった零は、白いチョークで木に矢印を書きながら進んでいた。

そこへ出合つたのがブラックスライムだったのだ。

ぴよつ、ぴよ。

《うわーん。人間こわいよ～》

『あたし、えーと怖くないよ。お友達にならう』

ぴよつ？

『ともだち？』

『うん、友達にー！あたしは靈ittこいつ。あなたは名前なんていうの？』

ぴつ、ぴよよ、ぴよう

『じずくねーあたちのなまえは…ないの』

『えーと、スライムだからスー。スーちゃんはどうかな？』

ぴよ、ぴよぴよ、ぴつ。

『あたしの名前スー。ありがとー！じずく』

ひつひつ、靈はこの世界に来て初めて友達をGetした。

* *

一方、孤児院では未だ帰らない妹の雪を姉の静香は心配していた。

雪が散歩に行くといって既に3時間が経過していた。

さすがにもう戻つて来てもいいはずの時間だ。

もひ、田が沈み始めていた。

「さすがにもう戻つて来てもいいはずですよ。ランスロット様?..」

「ええ、少し辺りを探して見ましょつ」

「はい」

……。

しばらく辺りを探す一人。

「ランスロット様、これ見て下せー」

静華が見つけたのは木の幹に白い矢印が描かれたものだ。

「もしかしたら…、零は魔守の森に」

心配した表情で静華が言つ。

「それでしたら、大変なことです。魔守の森は魔族達の数少ない住みかであり、そして時間の流れがここと違うのです」

「探さなくちゃー。」

「お待ち下さい。聖女殿」

今にも森へ入るうする静華をランスロットは肩を手に置き止める。

「いけません、お待ち下さい。」

「なんで！大事な妹が迷子になつたのよ。帰つて来ないのよ

静華は息を荒げて言ひ。

ランスロットは大人しいと思っていた静華の荒々しい状態を見て少し驚いたが、

「シズクは私が必ず見付けて帰りますから、あなたはこの事を他の護衛の者に知らせて、城へ伝えるようお願いします」

「…解りました、あのランスロット様にこれを薬です」

「ありがとうございます。では、行って参ります」

ランスロットは森の中へ入つた。

静華はランスロットの姿を見送ると他の護衛の兵士に伝えて自分は孤児院で一人の帰りを待つことにした。

* *

ぴい、ぴよっ。

『はつかけよ~い、のこつた』

かぱつ、かつぱ

『せーの、かつた』

『うー、カツパ君つよいよ。3回勝負で3回とも負けちやつた』

零は現在、カツバと相撲をとつて遊んでいた。

何故こんなことなつていたかというと、森の中でスーちゃんとぴよ
ぴよと話していたら、子供のカツバが倒れていた。
子供のカツバはお皿が乾いていて飢え死にしそうだったのを川まで
運び助けて仲良くなつたのだ。

『あ～あ、少し汚れちゃつたね』

かぱ！

『いいところ知つてゐる』

『どこ?』

ぴよぴよ。

『あたちもいけるかな』

かぱ、かぱ。

『おいで、こっちだよ』

3人はこうして、カツパ君の案内で移動していた。

* *

（シズクはどうまでいったのだろう？…）

ランスロットは一人で零の行方を探していた。

木の幹にしつかりと描かれた白い矢印を頼りに進んでいる。

おかげでこちらも助かるし、シズクは見た目よりずっと賢い子だと

ランスロットは思った。

途中で川まで来て白い矢印通りに進んで行く。

すると、白い湯気が見えてきた。

硫黄の匂いがする。

木々をわけ進み、白い湯気が立ち込める水場で探していた人物を見つけてしまった。

温泉に浸かっている雲とふかふか浮かんでいるスーちゃんとばしゃばしゃ泳いでいるカッパ君を。

魔守の森 名無しの龍 3

「ランスロットはぼーっとその光景を見ていた。

魔族はランスロットもはじめて見たがこんなに愛らしことつか…逆に毒氣を抜かれる。

ランスロットの中での魔族に対するイメージがまたしても崩れてしまつた。

すると、雲は見知った人を見つけて声をかけた。

「ランスロット様、こんにちは」

「こんにちは…へ？」

「…………？」

雲は自分の頭に手を置いてみた。

あつ、かつら落としたみたい。

雪は兄と姉と同じ黒髪を隠していた。

理由は色んな意味で目立つると兄と姉が熱心に隠しなさいと勧められ焦げ茶色の地味なかつらと分厚い眼鏡で素顔を隠していた。

ランスロットは呆然と雪を見つけていた。

雪はなんでだね?へ

と氣になり、湯から立ち上がりランスロットに近づくと、

「…シズク」

「はい?」

ランスロットは雪の名前を呼ぶと自分の身に付けていたマントを雪の体に巻いて、
腕の中にぎゅっと抱きしめ、やつと雪の耳元にしゃべりやした…

「私の妻になつて下さい」と。

雪は抱き締められたまま、頭が真っ白になつていた。

いきなり、つま?

つまつて?

つまらない?

つまよひじへ

完全に混乱してゐる。

とつあえず、落ち着けあたし。

「ランスロッド様、いきなつぢつなさつたのですか？妻になつて下
せことは？」

「あの…、えっと、なにから話せばよこのか」

ランスロットは零の問いにしどろもどろになりながら、ハーバード
家に代々伝わる家訓を零に話した。

* *

「ランスロット様、大丈夫です。今回のは事故だし、それにあたし
のことがランスロッド様は、女の子だけ意識してないですよね」

「女の子だけ意識してない?」

「はいー・ランスロット様の家訓の『初めて見た裸体の異性を妻に持つこと』で異性として意識していない女の子にあたしませんか?」

こういいうのは主觀の問題でランスロット様からみて考えれば今回の約束な展開の故意で見た事故は家訓にのつとるに値しますか?」

「… わすがに問題がありか… とは」

「ですよね」

さすがに成人していない未婚の女性といつてもランスロットの中では零は小学一年生位に思われている…。

悲しいことだが今はその勘違いである意味助かつている。

恐るべし日本人のフェイスマジック だ。

「これは故意に起こってしまった事故です」

「はい、それじゃ！」

「ええ、今回のは一人だけの秘密にしましよう」

「良かつた！」

二人揃つて安堵する。

しかし、零の中では乙女として複雑だった。

＊＊

カツパ君とは温泉で分かれる事になった。

か
ば。

《九章賦》

『せよつね』

ぴつよ！

『まつたね！』

—○

「シズクは…解るのですか？」

「…なにがですか？」

「あの子達がしゃべっているのをです」

「普通に解りませう？」

雪はストライムのステッキを抱き上げトランスロッターの前に差し出した。

ステッキの触り心地はつるつるのすべすべで赤ちゃんみたいな肌でふにふにしていた。重さもなく軽くて簡単に風に飛ばされそうだ。

『ステッキ、ランスロット様です』

ぴい、ぴよ。

『ほんまめ、ほんまめ。あたかスー』

「なとと、しゃべってこらのですか？」

「うそうそ、うそうそ。あたかスーですと詰つてます

「もしもお願ひします。スー殿」

ぴよぴよ、ぴ。

『うれしいですか、よろこべ』

どうやら、ステちゃんにはひかりへ言葉が判るようだ。

それから、カツパ君と別れた一人と一匹は天気が悪くなつて来たので今日は近くの森の洞穴を見つけて一晩泊まることになった。

その日の夕食にはカツパ君からもらつたキュウリに森の中で見つけた甘酸っぱい赤い木苺とシイタケ似たキノコだ。

キュウリは歯で嚙むとカリッと音を立てて口の中でみずみずしく新鮮で美味しいキュウリの味を味わつた。

木苺の赤い実を口へ運ぶと甘酸っぱさが広がり一度味わうと病み付くになる。

最後のシイタケに似たキノコは念のため火を通したが一人とも一口

だけ食べて止めた。.

二人が一口だけ食べたのは種類が本当にシイタケか解らないからだつた。

この世界のキノコには『むらむら抱け』というシイタケに良く似たキノコがあり、かつて姉の静華がエヴァンナと共同開発してしまったむらむらの薬の原材料があるので。

二人のあまり思い出したくないものあり（一人は完全に記憶を作られているが）、因縁あるもので一口だけ食べて様子を見ることにしたのだ。

すると、雲が顔を真っ赤にさせて熱を出し始めた。

そう、子供が『むらむら抱け』を食べると熱を出す。

一口だけ食べてしまつたが熱は一時的でしばらくすれば治まるが雲が呼吸をあげて苦しむつだ。

ランスロットは森の中へ入る前に静華から貰つた薬袋を探してみた。

小さな小瓶に熱冷ましと書いた飲み薬を見つけた。

しかし、薬をなかなか飲めずにはいる雲。

ランスロットは仕方なく薬を口に含み、雲の小さな唇に自分の唇を重ねて薬を飲ませた。

少女の唇は柔らかく暖かい、初めて女性に口付けされた時は恐怖しか感じなかつたが……。

思えば騎士達の会話で恋人との口付けが甘いことについて、よく解つていなかつたが、いまなら少し解る気がした。甘いことはこうしたことなのだろう。

もし、愛しい人と口付けが出来るならどんなに甘いだらうかとランスロットは雲に良く似た少女のことを想つた。

魔守の森 名無しの龍 3（後書き）

「ランスロットは間違いなくロツコーンだと思つ人

はい、

手を擧げる作者…。

「…ん」

ドクンドクンとじつかりした心臓の鼓動を聞きながら雲は田を覚ました。

なんだね!?

雲は田を開くとハシスロットの腕枕で自分が寝ていることに気が付いた。

ふみやあー!

あたし昨日ビーハイキングやったの?

キノコ食べて…!

雲は両手で自分が服を着ていることに安堵する。

良かつた。変なことしない。

雲は昨日の晩からの記憶がないだけに少し不安に感じていたが杞憂

のようだつた。

しかし、今自分が置かれいる状態には問題がある。

なんで、あたしラッシュロット様に腕枕されて抱き締められるの？

雪の今の状態は、ラッシュロットの右腕に雪の頭を乗せ、右手は雪の細い腰に回されている。

これが中高生位の女子なら甘い雰囲気またはドキドキする展開になるが小学生が相手だとこりつはならない。

ラッシュロットも田を覚ました。

「……おはよひ。シズカ」

と寝惚けて人の名前を間違えるラッシュロットはそのまま雪の額に手をおいて前髪を搔きあげ、額に唇を落とした。

さすがの霊も「れにはせんせんときめなかつた…。

「おーい、ランスロット様。寝ぼけてないで起きて下をこ

ランスロットの耳元で大きな声で囁ひ霊。

「…あつすみません」

「びつやひ、せつせつ田が覚めたよつだ。

「おはようござまわ。お姉ちやんではなくてすみませんが」

雪はいつも笑顔で挨拶する。少し怒りの色を含みでいる。

「…おはようござまわ」

ランスロットの方は苦虫を噛んだ表情をして、雪の腰に回されていた手を離した。

朝の食事を終えた二人と一匹。

「ランスロット様はお姉ちゃんの」と、ビヒビ思こますか

いきなり直球玉を投げる。

「……？」

顔を真っ赤にむせるランスロット。

「言わなくていいです……。もう解りましたから」

ランスロットの一目瞭然の反応を見てしまった。

昨日は妻になつて下をことか言つてきたのはどこのどいつだ！と思
いながらも、姉を好きだと少しう年のよくな反応した目の前の大
人に同情した……。

あの姉でいいのですか？
と思いながら……。

「何故、シズクはこの森に入ってきたの？」シズクは靈に質問した。

「何を？」

「伝えるためにきました」

「お母さん魔王が伝えたかつた卵の中にいた子供の名前です」

「それは本物」

「たぶん、あの時はこちらにきたばかりで微かにしか聴こえなくて魔王の口の中に頭を突っ込んで見ましたが……」

「…………ですか。」

ちなみに魔王はその卵の子になんと名付けようとしていたんですか

？」

「××××」

「…魔族語のよつですね。私には解りません」

ぴょぴょ。

『あー。いい名前。あたち、ななしのビーリン、じって』

『知つてゐる? スーパーハンマーの』

ぴょ。

『ついのみゅうむにこるの』

「ヒカル一人でなにを話してこるのでですか?..」

『とーちゃんの会話にラブスロットが参加。』

「はい、スーちゃんがその魔王の子供を知つてゐるやうです」

「それでは、探さない訳にはいきませんね。早速探しに行きましょ
う」

「はい」

ぴよ、ぴよ。

《あんない、するでひ》

スーちゃんの思わぬ魔王の子の情報を得た一人は、スーちゃんの案内によつてその名無しの龍に会つこととした。

* *

移動していた霊とランスロットとスーちゃん。

「ランスロット様、お姉ちゃんのことなんですか？」

立ち止まるワンスロット。

「お姉ちゃん、男嫌いなので（本当はある意味では無類の男好きだけど）、これからはお互^{ひしょ}い好敵手になりますね（あなたの為でもありますー。）」

「解りました。レーヴィーとですね。これからは可愛いあなたシズカ殿を取り合^ううのですね」

余裕たっぷりの笑顔でワンスロットは言^いひ。

「お姉ちゃんの名前で呼ぶの禁止ですー聖女殿とお呼びなさい」

「はー、はー」

隣で話を聞いていたスーちゃんは、

《ふたり、いぢりやこぢりやして、ふー。》

変な誤解されてますよ、ご両人。

雪とラシスロットはスーちゃんの案内で『憂いの湖』にやってきた。

龍がいた銀色の鱗に太陽の光が当たつてきらきら輝いていたが傷だらけだった。

身体のあちこちが刃物で傷つけられて、まだ口が浅いのだろうか翼の根に近い背中の怪我が痛々しかった。。

傷ついた龍は瞼を閉じていたが一人と一匹の気配に気が付いていた。

『何しに来た、人間』

『あなたが魔王の子供ですか?』

『ぴよ、ぴよぴよ。』

『じんにひは、あたちスー。しずくで名前もひつたの、よひじへ』

龍は人間の子供がスライムと一緒に魔族語を話しているのに驚いた

ようだ。

『人間、私がそうだとしたらどうする』

『あなたのお母さんが魔王なら、あたしはあなたに名前を伝えなきやいけない』

龍は黄金の瞳を大きく見開いた。

故郷の山を追わされてからは周りの魔族から名無しの龍と蔑まれ、人間達からは怖がられて命すら狙われた。

今まで人間と言葉を交わしたのが初めてであり、ずっと探し問い合わせた答えをこの小さな人間が知っている。

だが、信じられる訳がない。

雪は龍に近付き傷跡が残り鱗が剥がれている所にそっと触れた、龍はヒヤツとしていて冷く硬い感触がした。

『人間、何をしている?』

龍は小さな人間に傷跡を触れられて困惑した…。

この小さな人間は何者なのだろう。

『ノアールは今までこんなに傷付いて、痛い思いしてきたんだね』

雲は手に触っている傷の深さに心がえぐられるように痛む。

『…何故、目から水ができるのだ?』

雲は龍に言われて自分が今、泣いていることに気付いた。

「大丈夫ですか、シズク?」

心配したランスロットが雲に言つ。

「…わ、からな…いです」

「はい」

ランスロットは雲を見守るよつてをいへ。

「龍の傷を癒してあげたいのでしょうか。これを使いましょう。あなたの姉上が作った傷薬です」

ランスロットは雲を追いかける前に雲の姉の静華からもひつた薬袋を開き『傷薬』と書かれた塗り薬を雲の前に差し出した。

「…ランス、ロット様」

雲はランスロットの手から傷薬を受け取った。

『ノアール、怪我の手当してくれてありがとう』

『…勝手にしろ、人間』

『ありがと』

雲は泣き止んで小さく微笑んだ。

雲は龍の背中に塗り薬を塗つた。

龍は今までに感じたことのない感情にどうしたらいつか困惑していた。

今まで傷を癒そうとしたものがいたるつか。私を『ノアール』と呼び、小さな手で私に触れて目から水を流す不思議な人間。

小さな人間に触れられるあたたかい温もりに龍の心は暖かい気持ちになっていた。

この気持ちが安心するという言葉なのだが、この龍は故郷を離れて以来、初めての経験だった。

『ノアール、もう大丈夫。あたし達と一緒に行こう』

雲は龍の顔に近付いてそっと抱き締めた。

『ええ、行く』

龍は知らない内に見えなくなり、銀色の輝く髪に黄金の瞳の17、8歳位の美少女が雲に抱き締められていた。

雪はびっくりしたが美少女のお姉さんが雪をぎゅっと抱き返した。

『もう一度、私の名前を呼んで』

『…ノアール』

雪はそのお姉さんの声が先ほど龍と同じ少し低めの心地よい声で同一人物だとわかった。

私の名前は、ノアール。

母上が名付けたかった私の名前。

でも、それよりもずっと大事な

人間の子が名前を呼んで一緒に行こうといってくれた。

もう、一人じゃない。

それだけで私は幸せだ。

『ノアール、涙が…』

ノアールは顔が濡れているのに気が付いた。

『私も、目から水が…』

すると、

ふに、ふに、ふにふに。

スーちゃんがノアールに近付いて顔をペろペろ舐めた。

ぴよ。

『しょっぱいでし』

スーちゃんはノアールの膝に座った。

『それは、涙だよ』

雲はノアールを見ていつた。

『…涙?』

『うん、うれしい時や悲しい時に、涙が出るの』

『そつか』

ノアールは雲を見て一人は一緒に笑つた。

＊＊

魔守の森を出た三人と一匹。

孤児院から黒髪の少女が目の下に見事なくまをつくりて駆け寄ってきた。

「雪……」

「お姉ちゃん！」

「雪のバカバカ！」

1週間も帰つて来ないで、すつゞく心配したんだから

「……い、1週間……もうめんなさい」

素直に謝る雲。

「でも、無事良かつた」

静華は雲を思いつ切り抱き締めて頭を撫でた。

「お姉ちやん、くつろじこよ」

「あ、『』めこー。」

静華は腕の中こころの妹を愛しそうに見つめていたがあるものに気がつぐ。

「雲、あの黒いスライムと銀髪の美少女は？」

「うん、友達だよ」

「やつか」

静華はせつこうとするすると力を無くす様に零に倒れこんだ。

「お、お姉ちゃん」

妹の無事を確認した静華はここ数日、眠れなく妹の帰りに安堵して眠ってしまったようだ。

「シズカ様をお運びますが

ラ NSロットの問い合わせ零は、

「結構で……おね、がいします」

零はしゃーと逆毛を立てた猫のようにラ NSロットを警戒したが、自分では姉を運べない…。

姉に触れて欲しくないと思いながら仕方なく、今回はラ NSロットに頼んだ。

その後、姉は3日間「じん」と眠り続けた。

* *

後日、城に着いた聖女一行のニュースでブラックスライムが一匹いたことで城中、大騒ぎとなつたが、

愛らしい容貌とぴよぴよと鳴く可愛い声にくりつとした濡れた黒珍珠のようにきらきらした瞳を見てしまつた人々を虜にするステーキ。

ある意味、魔族だ。

ステーちゃんの城での人気を聞きつけた新聞社がやってきてステーちゃんのことを紹介したいといつてきた。

「是非、我が『週間新聞アーティストリア』にステー殿のことを記事に

したいのですか?」

新聞記者がアラジン国王陛下に謁見していた。

「陛下、私にその記事に描かせて下せこ」

そつと、様子を見にきていた聖女が名乗り挙げた。

「その、私が記事を……」

何だか言つにくい新聞記者。

「良かぬ!」

王が一言で許可した。

「ありがとうございます、陛下」

静華はこつこつ笑顔で応えた。

ついで、聖女の静華は週間新聞で魔族のスーパーを記事に書くことになった。

新聞が発刊され、聖女が書いた話題性たっぷりの記事を読もうとしていた国民に驚愕きよくがくが押し寄せた。

作者 シズカ・スズキ

1 パタ田 ふるふる震えているスーパーちゃん。

2 パタ田 ふるふる飛んでくる。（注 歩いてる）スーパーちゃん。

3 パタ田 ぴよぴよ鳴いているスーパーちゃん。

4 パタ田 童わらわがつるつるしてくるスーパーちゃん。

なごじゅ、じつやあ――――。

4コマ漫画です。

スーちゃんの魅力を充分かつ無駄なく引き出しているのだ！

これは新聞には必ずなくてはならないものだ。

それがこの世界の新聞には一つもないのだ。

静華の予想は大当たり！

『週間新聞アーティストリア』は静華の描く4コマ漫画を目的に新聞を買う人が増えて新聞社は黒字となつた。

そして、スーちゃんを題にしているせいか、国内の魔族に対する風当たりや偏見が国内ではかなり薄れていった。

* *

「シズク、ここにいたのですわね」

「ノアがあなたを探していましたよ」

「エヴァ先生…」

『ノアール』は魔族語で皆が発音出来ないために『ノア』と近い名で呼んでいた。

ノアールは最初、零とスーちゃんだけしか心を開かなかつたが零の姉の静華とは親しくなつていた。

「エヴァ先生、どうしてあたしだけ魔族語が話せるのでしょうか?」

「やつですね、シズク、この水晶にまたあなたを見てみましょ」

雪はエヴァンナに言わせてもらつ一度、属性見て職業の所に新しく追加されているものがあった。

職業 児童小学5年

体育会系魔族言語術魔女っ子

あたしはアツ「ちやん的…

いや、変人する。

変換間違えた…

変身はしない。

サリーちゃん的だつて雪は頭の中で考えた。

「シズク、これから先はどうしたいと思いますか？」

「あたしは魔族に優しい世界にしたいです」

霊はすっと尋ねてた気持ちをエヴァンナに話した。

「シズク、それではこれから魔法を学ぶための学園に入つてみませんか？」

「はーー。」

霊は迷わず返事をした。

あたしはこの世界のことをわかつ知りたい。

『ノアール』や他の魔族達の役に立ちたいそつ思つた霊だった。

そして、霊はその翌日から『マラウイ魔法学園』に入学したのだった。

花街の悪夢（前書き）

新章です。

花街の悪夢

勇者一行がアディストリア公国隣国エタリーナに入国し、目的地に着いたのは旅に出てから10日目のことだった。

エタリーナは先代の国王陛下のリーナ王妃の故郷ではあるが、今回の旅は極秘でなので目立たずスマーズに旅することが出来た。

アディストリア公国は大陸の中では比較的中規模位の大きさで領土は広く北は世界一高い『水晶の山』があり、南が海が広がる。西は砂漠が広がり東に隣国のエタリーナがあつた。

勇者の静也達は最初の3日は町から町へと馬に乗りながら夜は宿に泊まつていったが国の国境が近くなるに連れて町が村へと替わり一晩は村の村長の家を訪ねては一晩泊まれるか聴いては快く泊めてくれた。

その後は大きな森を避けるため何もない荒野で初の野宿を勇者ははしたのだが、特に問題はなかつた。

エタリーナへの入国審査は実に簡単だった。

ルイズラム宰相が予め用意していた証明書を見せてあつさり國の中に入ることが出来た。

そして、静也達は目的地『花街』^{フラワータウン}を目指していった。

* *

花街は花があちらこちらに植えられて花の香りが街中に広がっていた。

この世界の今の季節は初夏に入ったばかりで青く紫がかつたエキザカムの花もちらほら咲き始めていた。

「（）で魔族の子が売られて捕まつたのは本当なんですか？」勇者の静也は尋ねる。

「その筈です。密売業者の秘密網から得た情報ですが……」

宰相のキールは答えて、それを聞いた静也は、

「み、密売、……」

静也は妹達を置いて自分だけがここに来たのが何となくわかった。

しかし、密売とは「はそんなに治安が悪いのだろうか…。

「ヨリ、そんな密売とかやつてやつてほナイでしょう」

「あ、はい」

「ヨリはネ、昼と夜ではかなり印象が違うわよ」

「やつなんですか、キールさん」

「二〇日で一人と親しくなった静也だが、意外なことに宰相の名前がルイズラム・ジ・ヤイアンすでに既婚者だったり、副団長はキール・ミナモトと日本人の名字に近かつたりとドラ もん的に縁があるのは気のせいだろうか…。

「今は昼を過ぎたばかりだが、夜の方が色々と情報が得られそうな

「うみじま」は、JR東北本線の駅で、JR東日本が運営する宿泊施設。

「そうですね」

「じゃあ、アタシがとおおおつてねー」

「普通の道を深めしよ」

キールがしゃべっているのを遮り静也とルイズラムの声が重なる。

キールはどんな宿に泊まるつもりだったのだろうか……。

花街の悪夢（後書き）

答え、超ファンシーなふわふわのもふもふしたぬいぐるみがたくさんある少女趣味のある意味ピンクな宿です。

時刻は夕方。

辺りは暗くなり始めて周りの建物に明かりが灯る。

昼は太陽の光が街を照らし花の香りが広がる緑豊かな街だったが、夜になるとまた違った情景になっていた。

現在、勇者一行は花街の街広場にいた。

広場には噴水や花時計があり時計の針は夕方6時近くを指していた、季節柄まだ日が沈みきっていない。

この世界には月が13ヶ月あり、1月が28日で構成されている。

地球の一年間とほぼ近い日数だ。

勇者一行は広場で情報を獲ようと変装して着たわけだが、

よりにじむよつて、

何で俺が娼婦をやんなきやなんねーんだよつー！

あと、キールさんも。

俺が…娼婦だなんて、

そ、最悪だ。

しかも今着ている服にも問題が…。

何故、和服？

全体が空色の生地に柄は上から下の裾にかけて舞い散る薄紅の桜が
広がり、帯はもえぎ萌色だ。

薄化粧をキールにしてもらい、髪は黒のお下げのカツラを被つた。

もう一人のキールに至つては見事に娼婦に化けている…。

紅いドレスに胸元はあいてないが、背中が大きくあいている。

スカートは長いが太ももから大きくスリットが入つて、そこから覗く黒いストッキングを履きチラリと見えるガーターベルトが艶かしい。

化粧も上手く、元々妖艶なキールだつたがそれに拍車がかかつたようだ。

紫がつた金の長い髪は腰までかかり、今まで簪かんざしで髪をアップに纏めていたので、髪を下ろした姿は新鮮でどう見ても女にしか見えない。

肝心の女性を表す部分にはパッドを詰めて誤魔化した。

静也は宣言する、俺は今まで女性の下着を着たことなどない。

今回の襦袢じゅばんを除いては、

結局、身に付けているではないか……。

* *

「二んばんは、お嬢ちゃん。今夜はわしと一緒に食事でもどうかね？」

60代位の初老の男が声をかけてきた。

「……え？、あ、あの……」

「お嬢ちゃん、もしかして初めてなのかい？」

「くづと首を縦に傾く黒髪のお下げの少女がそのまま顔を下に伏せる。

「さうか、じゃあ今夜は食事だけでも、すぐそこの店でもどうだい

？」

初老の男はそう言い、女装した勇者の静也はまた、頷いて後を着いていった。

店の中はひっそりとした上品でゆつたつとした酒場だった。

初老の男は女装した静也を席に座らせるに向かいの席に座り、注文表を静也の前に差し出した。

「さあ、好きな物を選びなさい」

「……お、水で

ウワツ声でやつと喋る静也に対しても初老の男は「ヤリッ（——）」と気持ち悪く笑つてきた。

静也は鳥肌を立てたのはいつまでもない。

「初めてで緊張しているんだね。わしが代わり注文を頼もう

そつとて初老の男はミートスパゲッティを二つ頼んだ。

「さて、お嬢ちゃんはどうから来たんだい」

「お、わっ私は遠くから……です

男の問いかけに答える静也。

チリン、チリン。

店の中に客が来たことを知らせるベルが鳴り響く。

赤毛の男と紫がかつた金の長い髪の女。

静也がよく知る知人が店に入ってきたのだった。

店の中に自分の良く知つた一人がいる。

静也は今までの緊張が溶けるように警戒心も緩んでいた。

注文したミートスパゲッティがきた。

「お嬢ちゃん、さあ、遠慮せずにこのチーズかけてをお食べ」

初老の男は粉チーズを静也のスパゲッティの皿にかけた。

男はまた気色悪い笑顔でまたニヤリ（――）として、「さあ」と
静也に食事を勧めてくる。

静也は仕方なくスパゲッティを食べる…。

スペゲッティにチーズの味はしないが変な味もしない。そのまま飲
み込み、男を見る。

「食べたね…」

男は二タリと笑い、静也は身の危険を感じて席を放れようとした。

が、

体が痺れて動けず、眠くなつてきた。

「お嬢ちゃん、さつきのチーズ粉は即効性の強い痺れ薬と睡眠薬だよ」

男はまた二タリと笑つて静也は意識をなくした。

* *

ちゅん、ちゅん。

雀の鳴き声で静也は目を覚ました。

古いかび臭い匂いがするベッドに静也は両手に手錠を掛けられて寝

かされていた。

和服はそのままで乱れていない……

良かった。

静也はひとまず他に何もそれでいないことに堵してほっと息を付いた。

しかし、昨夜はスペゲッティを食べてすぐに体が痺れて眠ってしまった

……凄く情けない。

妹達が居なくて本当にある意味良かった。

俺の新たなる黒歴史が妹達に知られなくて……。

静也がとつとめなくそんな考えをしていると、昨夜の初老の男が静也の様子を見に来ていた。

「お皿覚めはどうだい？」

お嬢ちゃん、「

「…何のために、ねつ私を監禁したんですか？」

静也は女の子と思つてゐる男に対し質問を投げ掛ける。

「もちろん、売るためだよ、お嬢ちゃん。珍しい黒髪に黒目だ！
お嬢ちゃんはきっと高値が付くだろ？」

男はまた二タリと笑つて静也に言った。

「お嬢ちゃんが売り出されるのは今晚だ。せいやー、良こ金持ちで
買われるといいな」

男は静也にさう告げて部屋から出ていった。

み、短くてすみませんm（――）m

「ヒーリー……、」鬱屈。勇者殿に女装はまあいとして、娼婦のよ
うな真似事をさせて捕らえて闇市場に競売に賭けるとは、勇者殿に
後で何どい説明したらよいのか……

「ふおおつほつほつほお、一度いいから、『悪役』をやつて見たか
ったのじゃあ。なかなかの氣色悪さをあらわす？」

「そんなことよりアタシのあの格好はないんじやなくて?
エタリーナ先代国王陛下?」

「ええじやあないか、キール。昨夜はよつと合つておつたぞ?」

「ヤダワア、モオウ。」鬱屈つてば、上手なんだから

キールがウインクする。

「しかしの、あの者、あの者が男なのが残念じやの。確かにあの者は妹がいるそうじやなあ。
妹達はどうじや？」

……。

沈黙する一人。

「ソウネエ、聖女様の方は綺麗な方ヨ… 外見は」

「ええ、キールの言つ通りです」

「何か性格に問題でもあるのかい？」

「いえ、性格は特に普段はお優しくて、穏やかなご氣性です」

ルイズラムは差し障りのない回答をする。

(（性癖に問題がありますが））

静華に対する男一人の言えない心の声。

いひ。

と笑いながら今頃、原稿をちやつかり書いているのかも知れない。

「それから、一番下のシズクはねえ。とおおおおおおつても幼いけど可愛くて強いのよ」

「キール、シズク殿はああ見えてもう一〇歳だか…」

「ええ！？」

キールは驚いたようだ。

「じい、その下の者は？」

「そうですね…。勇者殿の言葉を借りると天然でしつかり者だそうです」

「天然でしつかり？不思議ちゃんだのう」

「そうですね…。わたしもそう思います」

雪は魔女っ子なので幾分当たっている。

「しかし、お嬢ちゃん、いや勇者君はくタレじやあのう」

…（）隠居、それは言わなくとも読者の皆様は重々承知です。

「はあ、はつくしょん!」

同じ、建物の中でこんな会話などされているとは夢にも思わない勇者の静也は今夜の闇市場の競売に頭を抱え込んでいた…。

(…可哀想だな)
作者の心の声。

花街の悪夢 3・5（後書き）

最初からすべて仕組まれていたことでした。
作者にまで同情されて……

大丈夫！

きっと、活躍はある。

「あーれーとか、お代官様とかのセリフ無しで

やべー。

花街の悪夢 4（前書き）

本日、累計数PV 20.000 アクセスを越えました。

いつもお付き合い下さり、誠にありがとうございます。

前半は静也視点

後半は宰相視点になります。

その日の晩、俺は初老の男に田隠され、馬車に乗つて移動していく。

じこさんといつてもいい年の男は俺に対して丁寧な扱い方をしていた。

不安もあつたがルイズラム宰相やキール副団長がなにかしら準備をしているに違いない。

そして、とうとう辿り着いてしまった闇市場へと……。

どこかは知らないが花街の中心地から少し離れた場所に闇市場があつた。

俺は田隠しを外されて階段を降りるようじこさんに促されたて歩いた。

暗く狭い階段をゆっくり降りる。

冷たい石の階段を一步一步と降りていくと地下競売会場がそこにあ

つた。

競売にきた人々は誰だか判らないよう仮面をかけていた。

まるで仮面舞踏会のようだった。周りは皆、身なりの良い服をしてい。

きっと、この国の腐った貴族や金持ち達に、あるいは他の国から来た者もいるだろ。

俺は手錠で繋がれて不安はあるものの意外と落ちついていた。これから競売に賭けられる。

しかし、今夜は何か騒動が起こり失敗するだろと俺は思った。

* *

俺はじいさんと離れて別々となつた。

これから競売に賭けらるるために、俺は控え室に連れられていた。

控え室はどんよりとした重い空気が流れこれから売られるであろ

う少女達や男達までいる…。

…俺、別に女装しなくても良かつたのでは？

と、今更ながらに思った。

その中でも一際目を引く若い青年がいた。

自分より一つか二つ年上に見える青年は銀色の髪に黄金の瞳をした美しい青年だった。

青年は薄汚れた白いシャツに黒いズボンを着ていた。

肌は白く体格も男としては小柄な方だろうか。俺より細く頬りなさそうに見える。

青年は誰にも目を向けず魂がない人形のよつとも見えた。

何となく気になつて声をかけてみた。

「「ひんぱんは」

「……」

無言である。

「あなたは、どこから連れてこられたんだ？」

「××××××」

「…………すみませんでした」

「ひつやう、外国から連れ出されたのであります。言葉が通じない。

短い間に密売の商品とされる俺達は番号が書かれた板を首に掛けられて大きな鳥籠に一人一人閉じ込められていった。

これから始まるのは人身売買だ。

この国では禁じられている違法行為。

* *

今夜、行われる人身売買の参加者はこの国の先代国王陛下と私とキールを除いて27名。

月に一度のペースで開いているらしい。

この国では数年前から頻繁に人が拐われたり、誘拐されたりしていたらしい。

それはエタリーナ国内だけの問題がだけではなく、アディストリア公国にも被害がでていた。

『魔族の仕業』として魔族の討伐や殲滅を数年やつてきたらしいが魔族達の数は減っているのに人拐いは減らず、被害は益々増える一方だった。

これに以前から疑問をもつっていたエタリーナ国の先代国王陛下は自ら調べて密売をしている人間達が『魔族達の仕業』と言いふらし、更に美しい人形の魔族を捕まえて無理矢理、春を売らせていることも先代国王陛下は調べていた。

今では複数ある密売組織の中でも今回の獲物は大きな組織だ。ご隠居の護衛の兵が百五十人建物の外回りに配置させている。

今夜、会場が大騒ぎになるのは間違いない。

控室に魔族が捕まつっていました。

静也はまだ気付いていない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0994x/>

鈴木三兄妹、異世界へ行くっ！！

2011年11月12日02時07分発行